

平成28年度多摩未来奨学金報告書

## 巻頭言

我が国の今後の発展は「地域再生」の可否にかかっていると見てよい。グローバル時代だからこそ、ローカル「足腰の重要性」が浮かび上がる。「補完性の原理」に基づく国と地域との分業と連携が前提になるからである。

ところが、その「地域」が人口減少時代を迎えてぐらついている。時間距離を勘案して「人口は職を求めて移動する」から、東京一極集中傾向と同時に都道府県所在地などの地方核都市への多極集中傾向が同時に起こっている。また、相も変わらず国の政策は地域の均質化を助長するような「地方創生戦略」しか描けていない。これは着実に相互にライバル視した「都市間競争」を本格化させる。これは浅薄な適者生存の社会ダーウィニズムを意味する。これではグローバルな都市間競争のお粗末すぎる二番煎じでしかない。

都内においても同様の動きがある。若い人口を中心に「都心回帰」が進行中であると同時に、それを追いかけるように大学も都心に向けて移動を開始しました。1970年代から80年代に起こった「郊外の時代」が完全に終わったことを意味する。都心に多摩地域は置いてきぼりを食うのだろうか、という疑心暗鬼が多摩地域に漂い込んでいる。

しかし、多摩地域に代表される「郊外」は都心に比較して見劣りするのだろうか。そんなことはない。公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩は「多摩の魅力を発見し、それを進化させ、それを発信する」使命を持って平成14年に任意団体からスタートした。大学を核として、行政と企業のそれぞれが持つ能力と資源を用い、連携を組みながら多摩地域の活性化に向けて貢献しようという基本的な認識のもとで結成された全国でも有数のかつユニークな産官学連携組織である。

文部科学省の「産学合同スカラシップ」事業の支援を受け発足した「多摩未来奨学金」制度は、都心回帰に揺れる多摩地域の再活性化、「郊外のルネッサンス」を若い意欲的な学生に委ねようという目的で始まった。多摩地域が持つ地域資源は、よく言われる自然環境だけではない。明治・大正・昭和・平成それぞれの期間で生まれ成長してきた万を超える活力あふれる優秀な企業群も重要な地域資源である。多摩に学ぶ学生はそのことを十分認識しているわけではない。多摩が持つ行政課題についても熟知しているわけでもない。このことは、大学が地域の中で様々な活動の拠点（Center of Excellence）として地域から期待されていることを踏まえると看過することは出来ない。多摩未来奨学金制度はそのことを鑑み、単に給付型の奨学金制度にとどまることなく、給付を受ける有為な人材に対して、もっと多摩地域に目を向け、多摩地域が抱える課題に果敢に挑戦し、多摩に存在する企業・行政・大学の蓄積した人的資源との積極的なネットワークを活用する機会を提供しながら育ててゆく「仕組み」を組み込んでいく全国でもユニークな奨学金制度である。産学官がその連携の強みを発揮し、共同して人材を育てる持続可能な奨学金制度を目指して、これからも「多摩未来奨学金」事業を前に進めてゆきたい。

本報告書はその意味を含め、この事業に賛同いただき、協力を惜しまない志の高い企業や大学の方々に対する感謝の気持ちを込めた「多摩未来奨学生」達の一年間をかけた活動報告である。ここに一言感謝の気持ちを込めて挨拶とした。

公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩  
会長 小川 哲生  
専務理事 細野 助博

## 多摩未来奨学金とは

多摩未来奨学金は、多摩地域の企業・団体等の出資で奨学基金を作り、本法人加盟大学・短期大学の学生を対象とした奨学金です。

ネットワーク多摩の加盟大学・短期大学で学ぶ学生を、産官学（職員、教員、社員等）が協働し、多摩地域の活性化を目的とした活動等を通して育成することを目的とします。また、資金を拠出していただいた企業・団体、地方公共団体等にとってもメリットが得られ、大学にとっても有為な人材を社会に送り出す手立てとなる制度となることを目指します。

加盟大学・短期大学から選抜された多摩未来奨学生は、大学教員および専門家の指導の下、地域活動や企業訪問を通し、グループワークを行い、企業や地域への提言書を発表する「多摩未来奨学生プロジェクト」に参加します。これは多摩地域の学生が、地域企業・団体等に対する理解を深め、多摩地域活性化に資する人材を育成するプロジェクトです。

## 多摩未来奨学金審査委員

審査委員長	佐藤 浩二（多摩信用金庫 会長）
副審査委員長	白井 努（京西テクノス株式会社 代表取締役社長）
審査委員	小川 哲生（学術・文化・産業ネットワーク多摩 会長）
審査委員	田中 優子（法政大学 総長）
審査委員	清水 庄平（立川市長）
審査委員	馬場 弘融（前 東京市町村自治調査会 理事長）
審査委員	田辺 隆一郎（八王子商工会議所 会頭）
審査委員	花村 邦昭（大妻女子大学 学長）
審査委員	細野 助博（学術・文化・産業ネットワーク多摩 専務理事）

敬称略  
(平成28年)

# 目次

巻頭言	2
多摩未来奨学金とは	3
平成28年度 多摩未来奨学金 募集要項	6

## 平成28年度 多摩未来奨学金提言発表会

主催者挨拶	11
会場校挨拶	12
来賓挨拶	13

## 多摩未来奨学生プロジェクト提言発表内容

健康・福祉・環境 グループ	15
教育・文化 グループ	33
環境・産業 グループ	55
講評	86

# 平成28年度 多摩未来奨学金 募集要項

## 応募資格

### (1) 推薦学生

本奨学金制度の大学選考を行うネットワーク多摩加盟大学および短期大学所属の大学生（大学1年次～3年次／短期大学1年次）で学長等の推薦を受けた者。本奨学金の趣旨を十分に理解し、多摩未来奨学生プロジェクトに積極的に参加できる者とする。

### (2) 公募学生

本奨学金制度の大学選考を行わないネットワーク多摩加盟大学・短期大学所属の大学生（大学1年次～3年次／短期大学1年次）。本奨学金の趣旨を十分に理解し、多摩未来奨学生プロジェクトに積極的に参加できる者とする。(1)の大学選考に不採用の学生でも公募での再応募を受けける

- \* 次年度大学生・大学院生でないものは除く。
- \* 大学選考については所属大学で確認してください。
- \* 日本学生支援機構並びに、学内奨学金、その他奨学金または授業料減免との併用可。併用する際、他奨学金でも併用可能かをご確認の上で申し込んでください。

## 給付金額

年額、30万円を給付（2回に分割）

## 採用者数

大学推薦者から25名程度（公募学生から若干名含む）  
\*ただし、当年度の寄附額が目標額を下回った場合はその限りではない。

## 応募方法

### (1) 推薦学生

下記の必要書類を添えて、所属大学・短期大学の多摩未来奨学金担当窓口にご提出ください。なお、書類の提出締切日については、所属大学担当窓口でご確認ください。

#### 【提出書類】

- ①多摩未来奨学金申込書
- ②多摩未来奨学金 応募小論文（2,000字見当）  
テーマ「魅力的な多摩地域にするために、あなたのしたいこと、出来ることは何ですか」

大学奨学金窓口からネットワーク多摩事務局への書類提出期間

平成28年10月1日（土）～10月27日（木）（書類必着）

### (2) 公募学生

下記の必要書類を添えて、ネットワーク多摩事務局に郵送（書留）にて公募受付期間中にご提出ください。

#### 【提出書類】

- ①多摩未来奨学金申込書
- ②多摩未来奨学金 応募小論文（2,000字見当）  
テーマ「魅力的な多摩地域にするために、あなたのしたいこと、出来ることは何ですか」

公募受付期間：

平成28年10月21日（金）～平成28年10月27日（木）  
書類必着

\*所属大学に報告してください。

## 選考方法

	推薦学生	公募学生
一次選考	所属大学・短期大学にて、提出書類並びに面接等により選考。順位を付けずに、多摩未来奨学金審査委員会へ推薦する（3名以内）。 *選考の日程については、各所属大学担当窓口でご確認ください。	所属大学・短期大学にて、提出書類並びに面接等による選考審査はございません。但し、所属大学・短期大学へ応募の旨をご報告ください。
二次選考	多摩未来奨学生プロジェクトコーディネーターによる書類審査 *平成28年11月2日（水）～平成28年11月11日（金） *審査結果は所属大学を通じて応募学生に伝達する。	
最終選考	多摩未来奨学金審査委員会、多摩未来奨学金コーディネーターによる審査（書類・面接） *提出書類等を総合的に評価し、多摩未来奨学金審査委員会にて審査を行います。 *平成28年11月20日（日）	

## 採用の通知

奨学生が決定次第、ネットワーク多摩が本人並びに所属大学・短期大学に通知します。

## 採用決定後の提出書類

1. 誓約書
2. 多摩未来奨学金 口座振込依頼書（奨学生用）

推薦学生は所属大学を通じてネットワーク多摩に提出。  
公募学生は直接ネットワーク多摩に提出。

## 奨学金の給付

奨学金は、交付式後と提言発表会後の2回に分けて採用者本人名義の口座に振り込みます。

## 奨学生の義務

1. 採用が決まった奨学生は、多摩未来奨学金交付式に参加。  
平成28年12月4日（日）  
※会場の都合で日程を変更する場合があります。HP等でお知らせします。
2. 「多摩未来奨学生プロジェクト」に参加。  
ネットワーク多摩加盟大学・短期大学から選抜された多摩未来奨学生は、「住むー健康・福祉・環境」「育てるー教育・文化」「働くー産業・企業」の3つのテーマを考察し、大学教員および専門家の指導の下、地域活動や企業訪問を通しグループワークを行い、企業や地域への提言書を発表する『多摩未来奨学生プロジェクト』に参加します。
3. インターンシップへの参加が望ましい。
4. 多摩未来奨学生プロジェクト提言発表会（平成29年12月上旬予定）に参加する。

## 9. その他

多摩未来奨学生プロジェクト活動において、特に顕著な活動もしくは提言を行った学生には特別奨励金を給付する。

平成28年度 多摩未来奨学金提言発表会

## 平成28年度多摩未来奨学生プロジェクト提言発表会次第

日 時：平成29年12月3日（日） 13時00分～18時25分（開場：12時15分）

場 所：明星大学 32号館1階108教室（東京都日野市程久保2-1-1）

### 1. 開会式・特別講演 13時00分～

大日向雅美氏 恵泉女学園大学 学長

平野博紀氏 文部科学省 高等教育大学振興課大学改革推進室 室長

### 2. 平成28年度多摩未来奨学生プロジェクト提言発表会 14時30分～

健康・福祉・環境グループ 『多摩を変える！ソーシャルビジネス』

教育・文化グループ 『多摩のいいねを発掘しよう』

産業・企業グループ 『多摩地域の「生業づくり」プロジェクト』

### 3. 交流会 17時10分～

network  
TAMA

平成28年度多摩未来奨学生プロジェクト  
**提言発表会**  
2017年  
**12/3** [日] 13:00～17:10 開場12:15

明星大学 日野キャンパス32号館108教室  
参加費無料

**特別講演**  
大日向雅美氏 恵泉女学園大学 学長  
平野博紀氏 文部科学省 高等教育大学振興課大学改革推進室 室長

\*本報告書は本報告書は平成28年度多摩未来奨学生プロジェクトの概要、内容、日程、申込について詳しく説明しています。

#### 多摩未来奨学生プロジェクト推進角度

健康・福祉・環境グループ 多摩を変える！ソーシャルビジネス

教育・文化グループ 多摩のいいねを発掘しよう

産業・企業グループ SNSを用いた多摩地域振興企画の提案

健康・福祉・環境グループ 多摩地域の「生業づくり」プロジェクト

産業・企業グループ 生業マルシェで学生と企業の繋がり作り

#### スケジュール

13:00 開会挨拶

13:15 特別講演

14:30 平成28年度多摩未来奨学生プロジェクト提言発表会

17:10 交流会



▶ お申込み  
ネットワーク多摩 HP (<https://www.nw-tama.jp>) よりお申込みください。  
お申込締切:2017年11月22日(水)

▶ アクセス  
多摩モノレール「中央大学・明星大学駅」直結(会場まで徒歩7分)  
多摩モノレール「日野駅」下車徒歩10分  
○JR中央線「日野駅」C改札口徒歩10分  
○JR中央線「加原」C改札口徒歩10分  
○京浜東北線「日野駅」徒歩10分

▶主催：公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩 ▶お問い合わせ 電話：042-591-8540 メール：[office@nw-tama.jp](mailto:office@nw-tama.jp)

## 主催者挨拶

公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩 会長

明星学苑 副理事長

小川 哲生

皆さん、こんにちは。12月に入りまして日曜日でご多用の中、この大学のキャンパスも多くの人が走っています。本当に師走になったと実感しております。

ご案内のように、このネットワーク多摩ができたのは10年少し前ですが、この近辺は、40年ぐらい前から急激に開発されました。当時、私が相模原の中学校に通っていた折り、中学2年生の遠足で多摩動物園に来たことがあります。その頃、このあたりは全部、原野でした。まさかここに学校ができて、その学校で働くとは、当時に私は思いもしませんでした。

そうして多くの郊外型の大学が増加して、八王子だけで23～24校の大学が来ましたが、今はそのことが"反対側の問題（都心回帰）"を起こしています。

多摩地区だけで人口が420～430万人、市町村や大学の数も圧倒的に多いです。ところが学生さんに目を向けてみて、就職先となると、東京駅近くの丸の内や大手町の会社のほうにしか目が向いていません。多摩地区には優良企業が山ほどあるのに、そういうことではちょっとおかしい現象ではないかと思えます。

そしてもう一つは、1万5,000以上の企業と多くの大学や地方自治体があるので、この多摩地区の発展だけでなく、多くの大学と行政が揃っているならば、いろいろな人材養成の場としても展開できるだろうという思いで、このネットワーク多摩を作った訳です。

こうして、多様なプログラムを行っていく中で、奨学金を企業様からいただいて、その見返りというわけではありませんけれども、各大学の若い学生たちの中でアイデアを出しているいろいろなことを実行してもらえば、企業にとっても良い刺激になり、学生側から見てもインターンシップも含めての刺激になり、場合によっては地方自治体にとってもプラスになるだろうということで、まさに未来プロジェクトという形で始めました。

今日はその第4回目の発表会ということで、ぜひ、奨学生たちのいろいろなアイデアを聞いていただけたらと思っております。

なお、本日は、お忙しい中、恵泉女学園大学の日向学長と文部科学省の平野様に来ていただいて、お話しただけということで大変楽しみにしております。今日はよろしく願いいたします。

## 会場校挨拶

明星大学 学長  
大橋 有弘

本日は、平成28年度多摩未来奨学生プロジェクト提言発表会に多くの方にご参加いただき、ありがとうございます。会場校の立場から、一言ごあいさつ申し上げます。

この提言発表会を主催する学術・文化・産業ネットワーク多摩は、ただいま、小川会長からご紹介がありましたように、多摩地域を中心に大学、行政、企業、団体、この協働を通じて地域の活性化あるいは地域の発展に寄与するという趣旨で設立された公益法人です。

現在、産官学の人材育成コンソーシアムは全国的に存在しています。この全国にあるコンソーシアムの中でも、ネットワーク多摩は、規模、活動内容あるいは実績で高い評価を上げているところです。

本学においても、実践的な体験教育に力を入れてきている立場から、この実践教育の対象として多摩地域のさまざまな組織、人々と連携活動を展開しているところです。そういう意味で、本日、本学での多摩未来奨学生プロジェクトの提言発表会をさせていただくことは誠に光栄であると考えております。

この奨学生プロジェクトは、今回で4回目を迎える訳ですが、毎回、若者らしい、そして斬新な考え方で提言発表を行ってきたと考えています。今回も「健康・福祉・環境」「教育・文化」「産業・企業」の3グループからの提言発表会が予定されています。私はその発表を楽しみにしているところです。

本日は、これらの提言発表会に加えて2つの特別講演が企画されています。1つは、恵泉女学園大学の大日向雅美学長から、「地域づくりは老若男女共同参画で～小さな挑戦が大きな社会実験に～」というタイトルでご講演いただくことになっています。このご講演は、多摩地域の発展に関して、連携活動を推進している私どもにとっても重要なテーマだと思っています。

また、文部科学省の高等教育局大学振興課大学改革推進室の平野室長から「高等教育行政の動向」と題してご講演いただきます。本学も大学改革そして教育の質の向上については、重要で喫緊の課題だと捉えております。

奨学生の提言発表と特別講演が爽りある会になることを祈念して、私の挨拶とさせていただきます。今日はよろしく願いいたします。ありがとうございました。

## 来賓挨拶

東洋システム株式会社 代表取締役社長  
飯田 哲郎

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました東洋システムの飯田でございます。

この多摩未来奨学金は、ご案内のように普通の単なる奨学給付の奨学金とは違います。グループワークとか中間発表で毎月、学生さんが集まって、コーディネーターの指導のもとに、さまざまなテーマについて協働して活動を行い、本日、発表するものでございます。

私は、ネットワーク多摩の細野専務理事からお声を掛けていただきまして、多摩未来奨学金に些少ながら参加させていただき、大変に光栄に思っております。今日、また自由な若々しい学生らしいアイデアが出るのではないかとということで楽しみにしております。

「健康・福祉・環境」グループの「多摩を変える！～ソーシャルビジネス～」、また、「教育・文化」グループの「多摩のいいねを発掘しよう～SNSを用いた多摩地域振興企画の提案～」があります。さらに、このSNSを若者はどうやってこれから使っていくのか、また若者らしい使い方といったものを教えていただきたいです。

若者の考え方、AIとかディープラーニングなどよく言われていますけれども、やはりその前に、若者はどんなことを考えているのか、どんなことを知っているのかといったことをしっかり私は勉強していきたいと思っています。

そして、「産業・企業」グループの発表は「多摩地域のなりわいづくりプロジェクト～なりわいマルシェで学生と企業のつながりづくり～」です。仕事を通して生活していく、売上が上がる、利益が上がる、残念ながらそうしたビジネスは今、ありません。この意味で多摩の学生が足で稼いで、いろいろアンケートを取ったり、実感でこれはどうだろうかという試みは、本当に素晴らしいことだと思います。

今回のイベントの中で、学生同士、また学生と企業が人的なネットワークをつくっていくというのが、最大の私たちの財産ではないかと思えます。

また、本日は、大日向学長から「地域づくりは老若男女共同参画」ということで、また、文部科学省の平野室長から「高等教育行政の動向」と題してご講演をいただきます。これもしっかり見定めていきたい、教えていただきたいと楽しみにしているわけですが、よろしく願いいたします。

最後になりましたけれども、この未来奨学金は多数の出資企業の皆さまのおかげで成り立っています。多数の皆さまのお力添えに対し厚く感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

## 特別講演

### 「地域創りは老若男女共同参画で ～小さな挑戦が大きな社会実験に～」

大日向 雅美  
恵泉女学園大学学長



専門は発達心理学。お茶の水女子大学大学院修士課程修了・東京都立大学大学院博士課程満期退学。学術博士。

1970年代初めのコインロッカー・ベビー事件を契機に、以来、40余年母親の育児ストレスや育児不安を研究し、地域のNPO活動にも取り組んでいる。

恵泉女学園大学には1989年から勤務、2016年4月から現職。

#### 主な社会的活動

NPO 法人あい・ぽーとステーション代表理事

内閣府：社会保障制度改革推進会議委員/子ども・子育て会議委員

NHK 中央放送番組審議会委員長、住友生命保険相互会社社外取締役 他

### 「高等教育行政の動向」

平野 博紀  
文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長



2002年早稲田大学政治経済学部卒業、同年文部科学省入庁。高知県教育委員会生涯学習課長、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課課長補佐、スポーツ庁競技スポーツ課課長補佐を経て、本年7月より文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長。



## 健康・福祉・環境 グループ

### 多摩を変える！ソーシャルビジネス

#### 多摩未来奨学生

- 上杉 由香里 (中央大学 法学部 1年)
- 内田 紗季 (桜美林大学 リベラルアーツ学群 1年) 前期のみ
- 江田 有希 (中央大学 法学部 2年)
- 片野 幸太 (明星大学 教育学部 1年)
- シェルパ ミングマ (嘉悦大学 ビジネス創造学部 2年)
- 松浦 由美子 (嘉悦大学 経営経済学部 2年)
- 山村 香織 (多摩大学 経営情報学部 1年)
- 渡辺 大智 (創価大学 法学部 1年)

#### コーディネーター

- 犬塚 潤一郎 (実践女子大学 生活科学部 現代生活学科教授)
- 込戸 雄太 (株式会社キャリア・ママ 営業部部長) 前期
- 村田 直美 (株式会社キャリア・ママ 管理部部長) 後期

**要旨：**

ソーシャルビジネス起業塾を、新たな地域活性化の形として提案します。

地域の問題は、自分が住む、自分がその一員である、共同体の問題です。その意味では、自分の問題は自分で考え対処する、ということが基本となるでしょうが、実状はそうっていないのではないのでしょうか。政府や企業など、地域の問題を誰かの問題にすり替えてしまう意識が生まれていると思われまます。

この問題に取り組むための基本とは、主体づくりではないかと考えられます。

地域の問題を自分の問題として捉える人づくりが課題となります。この「多摩未来奨学金プロジェクト」もそうであるように、大学生にはそのことを考え学ぶ機会が用意されています。その一方、このことを考えていくうえで私たちは、地域には十分に生かされていない大きな可能性を持つ方々の存在にも思い至りました。企業を退職し、まだ十分に社会で活躍できる層です。商品市場でのビジネスの経験は豊富ながら、社会事業についてはあまり経験のない方々。この人たちにとっても、私たち大学生と同じように、地域経営の主体となるためには、学習の機会や、仲間づくりの場が必要なのではないのでしょうか。

自分たちが地域社会を担う主体である、という意識づくり、特に企業経験者へ向けた意識の転換の仕組みづくりを目的として、学生がベテランとともに問題に向き合い、ベテランの知識・経験を新しい構造の上に生まれ変わらせる、そのような場づくりを提案します。

**目次**

1. 現状分析と課題認識	17
2. ソーシャルビジネスというかたち	19
3. 実現可能性の試行	21
テストケースの実施	21
テストケースイベントの詳細	23
当日の流れ	23
グループ発表の様子	24
イベント参加者	25
アンケート結果	25
4. 考察と提言	27
研究プロジェクトを終えて	28

**1. 現状分析と課題認識**

多摩地域の現状を挙げる前に、グループ発足当時、1年間の追求課題を行っていく上での共通の興味のある分野として、「高齢者」と「大学」というキーワードが挙がった。そこから多摩地域の高齢者を取り巻く環境と、その周囲の大学（生）の現状などについて述べていく。

まず初めに、多摩地域の現状については、「高齢化」「大学数」「NPO団体数」について述べていく。高齢化において東京都市整備局が示した、「多摩の拠点整備基本計画」<sup>1</sup>によると、「高齢化の動向についてみると、多摩地域では65歳以上の人口比率は、2005年までは23区を下回っているが、2010年に23区を上回り、その後も23区よりも高い比率で推移していく」<sup>2</sup>と報告している。東京都総務局行政部の「多摩の振興プラン」<sup>3</sup>では、2015年の多摩地域の高齢化率は約24%であるが、2040年には約35%まで上昇する可能性があり、今後さらに上昇する見込みもあると報告している。また2025年の多摩地域の後期高齢化率は現在より約5%上昇して約16%と推測している。さらに高齢者人口1万人あたりの特別養護老人ホーム及び介護法人保健施設の定員数、および老人クラブ数とシルバー人材センターの会員の就業率については、多摩地域が区部を上回っているとしている<sup>4</sup>。

高齢者の介護保険利用率をみると東京都福祉保健局高齢社会対策部が平成29年6月に挙げた「東京の高齢者とデータ集」<sup>5</sup>では、高齢者人口の増加や介護保険制度の浸透に伴い、要介護・要支援認定者の人数は大幅に増加し、後期高齢者（75歳以上）の要介護認定率は33.0%、前期高齢者の要介護率は4.7%であり、約7倍であるとしている<sup>6</sup>。一方、高齢者の就業状況については、65歳以上の場合、約25%程度が何らかの職についていると報告している。「多摩の振興プラン」においては、高齢者人口1万人当たりのシルバー人材センターの会員の就業率は2015年では、多摩地域が83.1%、区部が76.2%と多摩地域が区部よりも高い水準で推移している。大学数においては、「多摩の拠点整備基本計画」によると、「東京・神奈川・千葉・埼玉などの東京圏における大学の立地をみると、東京都は全体の約6割を占めている。多摩地域には東京都における全大学の3分の1にあたる59大学があり、隣接3県のそれぞれの大学数を上回る数の大学が立地している」とある。NPO団体数においては、多摩地域では23区には及ばないが、全国や隣接3県を上回っていると報告している。また多摩地域でシニアが活躍するNPO団体として、NPO法人福祉亭、街のお助け隊コンサルジュ、小金井雑学大学など多く存在している。

次に多摩地域における高齢者への支援について、どのようなものがあるか調べた。一例として前述の福祉亭がある。関西大学<sup>7</sup>によると福祉亭とは、多摩ニュータウンでの高齢者支援スペース

1 東京都市整備局、平成21年8月、「多摩の拠点整備基本計画」

<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/seisaku/tama/>

2 同書、「第2章 多摩地域を取り巻く状況の変化と課題」、p.2（人口の減少・少子高齢化の進行）

3 東京都総務局行政部、平成29年9月、「多摩の振興プラン」

<http://www.soumu.metro.tokyo.jp/05gyousei/06sinkoutamaplan2.html>

4 同書、「IV 多摩を取り巻く状況」、pp.43-44（高齢者の生活）

5 第1回東京都高齢者保健福祉計画策定委員会【平成29年6月28日開催】および第2回東京都高齢者保健福祉計画策定委員会【平成29年7月24日開催】別冊資料

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kourei/shisaku/koureisyaikaku/07keikaku3032/07sakutei/iinkai01.html>

6 同書、p.10（年齢階級別 要支援・要介護認定者数と認定率 東京都）

7 多摩ニュータウンでの高齢者支援スペース「福祉亭」の取組 関西大学 <http://www.kansai-u.ac.jp/ordist/ksdp/danchi/156.pdf>

の提案である。カフェを営業してした場所を利用し、囲碁・お喋りなど、多様な居方ができる高齢者の心安らぐ場所を作った。機能としては高齢者同士または地域社会を繋ぐ「交流」、「見守り」、地域情報の提供や生活相談など「生活支援」などを担っている。

最後に多摩地域でどのような高齢者がいるのか、私たちがターゲットとする対象をより明確にするために考えたとき、アクティブな高齢者とそうではない2通りの高齢者像を捉えることができた。アクティブな高齢者についてその実態やそのような考えを持っているかをより詳しく捉えるために高尾山口観光案内所(図1)と、秋川市民体育館(図2)に取材に行かせていただいた。

高尾山口観光案内所に取材に行った際には、定年した高齢者がボランティアとして観光案内所で働かれていた。観光客に対して道案内をしたり、高尾山の登山ガイドをしていただいている高齢者の方がいて、人によっては23区から、毎朝出勤しているケースも存在した。また外国のお客様に対しても高齢者の方が流暢な英語で対応していた。ガイドという仕事に強い生きがいを感じて働いていると伺うことができた。

次に秋川市民体育館に取材に行った際には、高齢者が15~20人程度集まって、体育館で運動をして汗を流していた。受動的に余暇の運動に取り組んでいる様子はなく、主体的に楽しんでいる様子が強く見受けられた。対して、前述にあるような介護保険を利用している高齢者も存在する。このようなことから、私たちは今後の多摩地域を活性化させる要因として前者のアクティブな高齢者にスポットを当てることとした。



(図1) 高尾山口観光案内所



(図2) 秋川体育館

## 2. ソーシャルビジネスというかたち

一方で地域課題の解決という側面から考えるなかで、ソーシャルビジネスという話題が挙がった<sup>8</sup>。ソーシャルビジネスとは、高齢出産や障害者の支援、貧困の削減、環境保全、地方活性化といった社会が抱える課題の解決をビジネスの手法で目指す取り組みである。つまり社会的課題を市場として捉え持続可能な経済活動を通して問題を解決していくこと。

このことを踏まえ、わたしたちは、アクティブに社会参加できる能力を備えた高齢者を“シニア世代”と呼びソーシャルビジネスを使った地域発展の方向性を模索した。そしてこのシニア世代が地域形成の主体として活躍することを促進する企画の検討をした。

このシニア世代は、長く産業界に従事してきた、ビジネス経験や知識が豊富である。しかし、長い仕事への従事期間を経てビジネスからリタイアしたシニア世代は、もう1度このビジネスの世界に関わることへの倦怠感や忌避感も少なからずある。シニア世代の能力や経験、知識を活かしながら、尚且つシニア世代の倦怠感も考慮した上で、何かビジネスの仕組みを生かした社会貢献が出来ないか、と考えた結果やはりソーシャルビジネスというかたちに結びつき、また更なる推進力として多摩地域の大学の多さからも、大学生の力を利用すべきという結論に至った。

まだまだ元気なシニア世代に対して、活躍する場、環境がないのがこれまでの実情であったと考えられる。ボランティアとして参加する機会はあるとしても、ボランティアの開催主体が設定した枠に縛られることがほとんどだ。シニア世代が培ってきたものを活かさないか。それが私たちの発想の起点となるものである。シニア世代のソーシャルビジネス事業の起業。それを大学生が主体となってプロデュースする。この仕組みが多摩地域に多く展開されると地域活性化に繋がるのではないかと考えた。その第一歩として、大学生とシニア世代が交流し、お互いの視点で地域の課題を発見し、認識してもらい解決方法を考えていくという場をテスト的に設け、開催することを視野に入れた。

もちろん実際に経験が豊富なシニア世代が起業する方が失敗は少ないだろう。意見、アイデアはプロデュースする側である大学生も出し、シニア世代には思いつかない新しい発想ももたらされる。きっと新鮮で斬新な形になると予想できる。しかし、その逆を考えてみる。起業をしたいと考える大学生を、逆にシニア世代がサポート、プロデュースをする。新しいものを創り出したい大学生を、経験や知識、時には融資というかたちでサポートする。そういった形も大学生とシニア世代の関わりをなかで可能になっていくはずだ。本当にその発想に価値があるものならば、今の時代にはクラウドファンディングというシステムもある。

クラウドファンディングとは、不特定多数の人が通常インターネット経由でほかの人々や組織に財源の提供や協力などを行うことを指す、群衆と資金調達を組み合わせた造語である。仮に、クラウドファンディングで資金を集めるということにする。大学生が企画までをし、その後は大学生とシニア世代が協力し、お互いの視点で発想の精度をあげる。経験のあるシニア世代だからこそのわかることも多いだろう。大学生も失敗するリスクが減ると考えられる。クラウドファンディングにより得た資金で、発想を形にすることができ、起業の一步となる。一方のシニア世代も、新しい取り組み、若い年代の育成をすることができ、生きがいをも見いだすことができるかもしれ

<sup>8</sup> 「起業するシニア、世のために働く「ソーシャルビジネス」、朝日新聞デジタル、2017年9月16日

ない。ビジネスにはリスクが伴うが、そのビジネスの一步として、クラウドファンディングを利用することは、非常に価値があることだと考える。意向の合う大学生とシニア世代をマッチングさせることも重要になってくる。そのマッチングの場の提供も今後は考えていかなければならない。ただ、このようなかたちでビジネスチャンスを掴むことができるという可能性を提案したいと考える。

ソーシャルビジネスについてさらに詳しく述べると、これは社会問題の解決を目的としたビジネスのことである。その事業領域は、貧困問題、差別問題、まちづくりなど多岐にわたっている。最大の特徴は、寄付金などの外部資金に頼らず、自らが事業収益が上げながら、継続的に課題解決に取り組むことである。

一方、ソーシャルビジネスが一般企業の営利事業と最も異なるところは、事業の目的として「利益の追求」よりも「社会的課題の解決」に重点を置いていることである。また、ソーシャルビジネスがボランティア活動と異なるところは、社会的課題に取り組むための活動資金を、寄付や行政からの助成よりも、ビジネスの手法を活用して、自ら稼ぎ出すことに重点を置いていることである。

ソーシャルビジネス一般については、経済産業省も着目していることが分かった。経済産業省の「中小企業・地域経済産業政策「ソーシャルビジネス」<sup>9</sup>を参照した。

同資料に挙げられている、「ソーシャルビジネス推進研究会報告書（平成23年3月）」によるソーシャルビジネスの特徴は以下である。

- (1) 社会性 現在解決が求められる社会的課題に取り組むことを事業活動のミッションとすること。
- (2) 事業性 上述のようなミッションにビジネスの手法で取り組み、継続的に事業活動を進めていくこと。
- (3) 革新性 新しい社会的商品・サービスやそれを提供するための仕組みを開発したり、活用したりすることとされている。

すなわち、社会問題への取り組みを「ビジネス」という手段で行い、それを通して新たな社会的価値を創出すること、それが「ソーシャルビジネス」なのである<sup>10</sup>。

経済産業省「ソーシャルビジネス研究会報告書（平成20年4月）」によると、ソーシャルビジネスの組織形態はNPO法人47%、株式会社21%、個人事業主11%、組合7%、その他14%となっている。また、事業者数は8,000、市場規模は2,400億円、雇用者数は3.2万人となっており、今後拡大する可能性がある。

<sup>9</sup> [http://www.meti.go.jp/policy/local\\_economy/sbcb/index.html](http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/sbcb/index.html)

<sup>10</sup> 同報告書には、多摩地区の例も挙げられている。

p.41（参考資料5:多摩信用金庫の取り組みについて）

・多摩地域のコミュニティビジネスの動き

・多摩地域中小企業応援センターの対応

### 3. 実現可能性の試行

続いて、私たちの取り組みについて説明していく。

私たちは、地域活性化の主体となる存在を多摩地域の60~75歳、退職されてもまだ元気で、地域貢献のために何かしたいと思っているシニア世代とした。特に具体的な場や機会がないため、その能力を生かしたくても生かしきれていないような人々向けの仕組みを考えた。また、この年齢層は今までは「職場」という居場所があったが、退職は大きな居場所の一つを失いそれに代わるものを見つけることが難しいのではないかと考えた。

今後ますます高齢化していく中で、この年齢層の力を活用することが、多摩地域の活性化において可能性があるのではないだろうか。そこで私たちは、こうした方々が本来の力を生かしきれていないという課題をこれからの取り組みのヒントとして、活動を進めてきた。

私たち大学生は、多摩地域の元気なシニア世代が自分でソーシャルビジネスの会社を立ち上げることに對して、きっかけづくりや支援体制づくりなどで応援しようと考えた。現実的には、起業塾の企画(プログラム作り、講師のコーディネート、企業連携のネットワークづくりなど)を大学生が担うということである。多摩地域の「シニア世代の活躍の仕組みづくり=起業」とし、それを促進する場づくりを、大学生が中心となり、応援していくソーシャルビジネス起業塾のようなものを作る。このような取り組みがこの地域で展開されれば、地域活性化につながるのではないかと考えた<sup>11</sup>。

次に、ソーシャルビジネス起業塾について説明する。多摩地域の大学生と、多摩地域に住んでいるシニア世代が、今の地域に対して、解決したい問題点や将来像について話し合う。まずこれがソーシャルビジネス起業の元となるアイデア出しの段階だ。その中から、その問題を解決するために、事業のプランを出し合う。そして、それを継続性のあるビジネスにするため、教授などの専門家のアドバイスをいただき、より具体的かつ現実的なものにしていく。このように、若い世代の枠にとらわれない意見、長年多摩地域に住んでいるシニア世代にしか見えてこない、地に足のついた意見、それを現実のものにするため、ビジネスの専門家の意見などの多様な視点から、社会問題の解決が継続性のあるビジネスを活用した取り組みによってなされると考えた。私たちの取り組みは新たな企業の基礎を形成し、組織・運営を編み出すまでの支援を行うものである。

#### テストケースの実施

私たちは「起業塾」が地域活性化の方法と考えた。若者である大学生と地域の人の交流、経験や知識と柔軟なアイデア、そして年齢性別を超えた交流が多摩地域に新しいイノベーションを起こすと考えたのである。しかしこれはあくまで仮定であり実効性・有効性を検証するために「地域の多様な資源と多様な人でつくる新しいチャレンジ」をテーマに、グループディスカッション式のテストケースを多摩大学の学園祭で行った。

私たちの考える「起業塾」とは学生と地域を熟知している大人が、よりよい生活のための問題

<sup>11</sup> 以下の書籍も参考とした：

『地域活性化マーケティング』高副謙司、同友館

『ソーシャルデザイン実践ガイド——地域の課題を解決する7つのステップ』寛 裕介、英治出版

『稼ぐまちが地方を変える 誰も言わなかった10の鉄則』木下 齊、NHK出版新書

点、また、事業のアイデアを出し合う。そして、それをビジネスプランとするために教授などの専門家のアドバイスをいただき、より具体的かつ現実的なものにする。つまりアイデアをただのアイデアでなく「起業」というかたちで実現させていく仕組みづくりを考えている。また、この多摩地域でのモデルを作ることができれば、多摩にとどまらず、日本中で大学生と地域との交流という形でのソーシャルビジネス起業・地域活性化対応が可能だと考えた。この多摩大学でのイベントは、あくまで私たちが理想とする起業塾のテストケースであったが、今回の世代間を超えたグループディスカッションによる地域交流の需要やマーケティングをすることができた。

また、地域のためのボランティアではなく、「ソーシャルビジネス」という考え方が今後少子高齢化などで衰退している地域には影響を与えると考えている。一過性ではなく、継続性を求めるうえで、この異世代グループディスカッションは新しい視点で物事をとらえ、身の回りで起きている問題点を誰かが解決してくれると他人任せにし、当然のことだから仕方ないととらえるのではなく、自分事としてとらえていく重要性を考えるきっかけ作りをすることができるのではないかと。いち住民であるからとにもアクションを起こさないでいては地方自治の衰退を止められない。誰かがリスクを冒してでも自らが動かなければならない。ボランティアとビジネスをつなぎ合わせることで、他人任せでなく、自分も地域の共同体の一部としてとらえていくため、「交流」という場が地域内にあれば、自分にはない新しい価値観を広げることが可能である。何か新しい事業アイデアを具現化するとき、誰かに押し付けるといった考え方ではなく、人々が認めてくれる、誰かのため・地域のためになるものを生み出していけば、必ず地域のために協力してくれる方がいて一つの共同体の取り組みにつながるはずだ。「IoT」社会といわれている現代で、地域に住む人だけでなく、日本中や世界中の人とネット環境でつながっていることも、リスクを押し付けあう関係ではなく、新しいものを一緒に作り出していく仲間であり、共同体として動くことを可能にするのではないだろうか。大学が多数ある多摩地域ですが大学生、地域住民の間での交流は現在あまり活発ではない。しかし、このような環境は多摩地域の貴重な資源であり、これを生かしていくことがまさにイノベーションでもある。

このような学生の斬新なアイデアを大学教授や大学関係者、また、そこから広げて市町村・企業の方と時間をかけて未来像を作る仕組みづくりである起業塾は、新しい価値観が世代を超えていくと考える。今回の多摩大学でのミニ起業塾は、本当にこの価値観を参加者どうしが共有しあえるか、また地域や身の回りの問題へのとらえ方が自分事として変化するかなどを知るチャンスであり、きっかけとすることを目的としている。「私」という主体づくりというのは、地域問題の押し付け合いではなく、この問題に取り組むための、まず第一歩、基本とすべき視点であるという認識が重要である。この考えは、「自分」から「自分たち」という意識の変換にも必要だ。そして、自分たちが地域社会を担う主体である、という意識づくり、特に企業経験者へ向けた意識の転換の仕組みづくりが必要となっていると考えられる。ビジネス経験がない学生が、経験者に対して教えることができるか、という問いは、まさにこの逆転構造を明らかにするきっかけとなるものだろう。当たり前を当たり前でなく、何を指すべきか、意識の転換に近い学生・若者がベテランとともに問題に向き合い、ベテランの知識・経験を新しい構造の上に生まれ変わらせることのきっかけになることも今回目指したいと考える。

## テストケースイベントの詳細

テーマ： 地域の未来を築く ソーシャルビジネス  
大学生と一緒に起業プログラム体験しませんか？

多摩大学の松本祐一准教授（地域経営論）にガイダンス担当をお願いし、全体の進行とワークショップのモデレーターを私たち奨学生で行う形式で、起業プログラムイベントを実施した。

### 当日の流れ

2017年11月12日13:00-15:30  
多摩大学 多摩キャンパス211教室

- ・本プロジェクトの目的紹介
- ・ソーシャルビジネスの講義（松本准教授）
- ・ワークショップ  
問題探し  
課題設定  
事業化分析
- ・グループ発表・意見交換
- ・フィードバック（松本准教授）

**地域の未来を築**

## ソーシャル・ビジネス

大学生と一緒に、起業プログラム体験しませんか？

電車・バスでお越しの方

永山駅バス乗り場2番  
聖蹟桜ヶ丘駅(桜06) 聖ヶ丘駅(地行)木34  
聖蹟桜ヶ丘駅バス乗り場12番  
永山駅(桜06)

※詳しくは多摩大学関係者公式ホームページをご確認ください

こんなシニアの方々・・・

これからは社会のために何かしたいと考えておられるシニアの方

ビジネスで培った知識・経験を別の形で生かしたい方

ひとつ若者と一緒に地域のことを考えるも面白そうと考える方

ぜひおいでください！

**日時** 2017年11月12日(日) 12:30(開場)13:00(開始)~15:30(予定)

**会場** 多摩大学多摩キャンパス211教室 (多摩大学学園内実施)

**主催** 地域活性化マネジメント委員会・多摩未来奨学金生

**講師** プログラム

松本祐一

の指導で地域問題解決型の起業支援プログラムを学びます。

- ① 講義と問題提起
- ② グループ・ワークショップ
- ③ まとめ発表とディスカッション

参加をご希望の方は、年齢・職業・性別を記入の上、下記よりお申込みください。

メールアドレス **tamakatu4@gmail.com**

※複数人で申し込みされる場合は、その方の年齢・職業・性別も記載願います

申込は11月10日まで

## グループ発表の様子



イベント内では三グループ（A・B・C）に分かれワークショップを実施した。

各グループに分かれて話し合いを行い、それぞれで意見をまとめ、以下のような発表を行った。

まず、Aグループはネコバスを多摩の街に走らせるのはどうかというビジネスモデルの提案があった。ワークの中で様々な意見が挙げられた結果、地域の名物・多摩地域といえばこれ、というようなものがない、地域の特性をいかしきれていないのではないかと課題があると考えられ、さらにアップダウンの激しい地形で移動が困難という生活上の不便もあった。これを包括的に解決するため、ジブリの映画の撮影地となっている場所があることを利用し、新たな多摩の名物としてのネコバスを街に走らせるという結果に至ったのだ。インスタ映えというSNSでの拡散も同時に狙うことを考えており、プロモーション方法まで検討されていた。また、イベント時には検討しきれなかったが、バスビジネスとしての事業性の可能性も検討できるとの講評があった。

Bグループの発表内容は大学生による高齢者向けの安価なIT（スマートフォンやパソコンの活用）教室である。高齢者は、外出が困難であることや、移動手段が少ないといった問題があり教室に通うことが難しい、という解決するために、高齢者向けのスマートフォン、パソコン教室を大学生が安い料金設定かつ身近な場所で行うことを提案している。高齢者が現代の通信技術を学ぶことでコミュニケーションの幅が広がることや独居している高齢者の安全にもつながる点が高評価であった。

Cグループは野菜の地産地消促進である。空き地・空き家問題の解決のため、これを有効活用できないかという視点からのアプローチであった。家庭菜園などで余った収穫物の回収、販売を大学生が担うというものである。家庭菜園を営む側の収益にも結びつき、かつ空いたスペースを利用、そして大学生と地域のつながり、購入者への安価な野菜の提供と地産地消という多様なメリットをあげている。

以上の三つが今回のイベントの中で発表された案だ。それぞれ今回のイベントで斬新かつ地域の声に根付いた提案を行っている点は松本准教授からも大変好評であり、今回の私たちの提言の可能性を実感させるものであると考えられる結果となった。

このようなイベントを行い、参加者が、

- ①地域課題を認識し、
- ②解決の方策を自分の問題として考え、
- ③実際に取り組む（起業する）という意欲の向上につながることを、

成果として期待されることであり、特に、若い世代との交流の中でリアリティを高めていくことが実感されることが望ましいと考えていた。

テストイベントの実施を通じてその様子から感じられたことは次のことだ。

- ・高齢者の知識力や意欲が高いことが見て取れ、やる気になる人がいそうだと感じる事ができた。
- ・持続性（ビジネスとしての実現性）が討論のなかで繰り返し指摘されていること実現性が高いアイデアが生まれやすかった。
- ・大学生との意見交換が想像以上に活発に行われ様々なアイデアが出されていた。

## イベント参加者

参加者：大学生10人 社会人7人

年齢：10代 2人 20代 7人 30代 1人 40代 0人 50代 5人 60以上 2人

参加者の属性は大学生が59%で、社会人以降が41%でほぼ半数同士であった、年代ごとでは20代と50代が最も多く、他の各年代はあまり人数に偏りがなかった。今回のイベントの主なターゲット層であった大学生とシニア層が多かったが、他の年代の参加者も満遍なく意見がかたよることなく様々な年代の話を聞くことができた。

## アンケート結果

満足度：大変満足 9人 満足6人 普通1人 不満足 0人 大変不満足 0人 未回答 1人

同イベントが開催されたら：また来たい 16人 来ない 0人 未回答 1人

満足度としては大変満足や満足が半数以上とイベントの評価としては全体的に好評評価だった。満足度も高かった参加者からの声として

- ・色々な発想があり面白い。
- ・地域の為にもいい機会になった。
- ・大学と地域交流を図る場として貴重な体験ができた。

などの感想があげられており、今回のイベントの目的の一つであった地域課題についても意識するきっかけを作ることができたのではないかと考えられる。

## 地域問題への関心が増したか： はい 7人

コメント これからはもっと深く考えていこうと思いました。

## 具体的な解決策としてソーシャルビジネスの可能性を感じる事ができたか： はい7人、とくになし1人

コメント 地域の問題を解決しそれを更に収益に変えるという試みは大変やりがいがあった。異世代での交流を通して地域への愛着をより作ることができ、地域性の向上を望め

ると考えます。

地域の問題提起では世代や生活歴によって問題意識を持っている対象に差が生まれたので、ビジネスチャンスとしてあり得ると感じました。

#### 足りないこと、難しいと思えるものはあるか

コメント 異世代でのグループワークを進行していくのが難しく感じた。

地域の課題を地域住民で考える機会は良かったが、ビジネスという継続性の観点からは疑問が残った。

ビジネスにすることで拡大するメリットを伝えるべき。

#### 現実化の為に何が必要と思うか

コメント 専門家による指導が必要になると感じた。

宣伝・広告・人が足りない。

どう地域に周知させていくかを考える必要があると思う。

内容を簡潔に伝えられる力。

#### このようなイベントに意義があると思うか

コメント 意義があると思う。

異世代や生活歴に差があり地域交流も少ないので地域一体化には大きな意味があると思います。

若者との新しい経験、大人にとってはいいと思う。

#### 今後の展開へアドバイスできる事があるか

コメント どう多くの世代を巻き込んでいくのか、今後このようなイベントを誰が継続して行うのか、継続性を持たせるにはどうすればいいかを考えればもっとよくなると思います。

問題に関心を向ける事が主題であればとても効果的であると感じた。実現を目指すのであればオブザーバーとしての専門家を入れる必要があると感じた。

## 4. 考察と提言

イベント実施を終えて、アンケート結果も踏まえ、以下のように考察した。

一つ目に、大学生と地域の方との交流の効果である。アンケートから分かる通り、普段大学生と意見を交換する機会のない地域の方にとってこのような機会は良い刺激となり好意的に受け止められていること、ビジネスプランの発表の面白さは教授からの好評もあったが、異なる観点から様々なアイデアの生まれる場として有効であり、大きな可能性を秘めているということが確認できたと思う。

二つ目に、アンケートのコメントでも寄せられたが今後検討すべき内容が多数明確化した。今回のイベントで実証されたのは大学生と地域の方とのディスカッションの有効性であり、ここで生まれたアイデアをソーシャルビジネスとして起業へ進めるのには、更なる様々な支援体制が必要である。まず起業や事業運営に必要な知識をどのように積むか、行っていく上で相談に乗りアドバイスしてくれる専門家をどのように見つけるかなどである。これは起業塾として提供するコンテンツのひとつにしたいと考えているが、この仕組みについては詳しい検討が必要である。起業にはやはりリスクの伴う不安が生じることが想定でき、この他にもサポートコンテンツを充実させねばならない。これらを含め、私たちの提案する、大学生による企業支援の組織像についてより具体的かつ詳細・明確に決定すべき出るとの結論に至った。

三つ目にイベントの不十分さである。まず対象としていた高齢者、60-75歳については2名(12%)と集客が不十分であった。これは準備期間の短さと高齢者に対するアプローチ・集客の難しさからその方法が適切でなかったことに起因する。これはイベントの開催にあたってのノウハウとして今後高めていきたいと考える。

四つ目は起業というリスクへの対策である。これは先述の通り、地域の課題について他人ごとではなく自分の問題として捉えること、起業というリスク・地域の課題の押し付け合いという構造から自分の問題は自分で解決するという意識の転換によって乗り越えられると考える。そのような意識改革も私たちの組織で提供する方法を探っていかなければならない。そもそもビジネスをリスクと捉える思考構造から抜け出すことが必要である。住民の地域共同体の一員としての意識が強まれば、地域の為に何かする主体が自分であるという考えに至るはずである。ソーシャルビジネスは、実需(社会課題)に対して収支が成り立つ解決方法を構想し実現を図ることである。その意味ではビジネス化とは、リスクを徹底的に低減させるための手法として意味を持つものである。自分の利益追求という利己的な原理を基礎とするのであれば、ハイリスク・ハイリターンも選択肢の一つとなりえるだろうが、ソーシャルという意味は、社会の利益追求であり、利己的な高収益を求める意味がない。ビジネスは何のために、という目的についての意識の転換・再生を図るのがプロジェクトの狙いである。

地域を担うという意識の転換を地域の人々のうちに引き起こし、持てる知識と経験を新しい(これまでとは逆向きの)方向性のうちに再生すること。事業の実現と持続性のために、研究者、企業、行政等々、ネットワーク的な連携促進を図ること。そのような継続的な支援構造をどのようにして生み出すか。

検討課題は多数残るが、地域活性化の推進力として「ソーシャルビジネスや大学生×地域の高齢者」というテーマの可能性は大いに期待できるものであり、今後大学生による起業のサポートの仕組みについてより詰めることで現実的・実現可能なものにしていきたい。

## 研究プロジェクトを終えて

上杉 由香里（中央大学 法学部 1年）

最初は多摩地域に貢献するという漠然な考えを持っていましたが、3つのグループの多摩への貢献の仕方は全く違います。色々な観点から見ることで、多摩地域の新たな一面を発見することができました。多摩地域はまだまだこれから素敵な地域になるんだと奨学生として、1年間過ごしてきて感じました。ひとつのグループとして結論を持っていくまでに、同じグループの皆にはとても助けられました。育ってきた環境や今置かれている環境が違うからこそ、色々なアイデアが生まれる。改めてそこに気づけました。多摩未来奨学金の奨学生にならなければ、自分の住んでいる多摩地域をこんなに深く考えることはなかったと思います。自分の住む地域を知ることが大切なはず。自由な思考を持っている学生時代のうちに、理解を深められたことを嬉しく思います。最後に、このネットワーク多摩に関わってくださった全ての方のおかげでそれぞれの奨学生の今があることを、心から感謝します

片野 幸太（明星大学 教育学部 1年）

1年間の多摩未来奨学生プロジェクトを終えて、実際に現地調査や取材に行ったことにより、多摩地域への理解・関心が深まったことはもちろんであるが、最も大きな収穫としては、探究課題を実際に1年間継続できたことに大きな自信を感じている。

実際の活動内容としては、私が現在理学療法士として、高齢者施設に勤務している関係もあり、高齢者をターゲットに1つのテーマとして探究課題を深めていく過程は、医学的知識の専門性を活かしながら、積極的にグループワーク中にも発言していったと実感している。しかし、その反面、班員の中でも同じ高齢者でも観点の違いから、アプローチをかける点がずれて、実際に1年間のテーマ決めに難渋し、時間を割いてしまったことは大きな反省材料である。グループワークであり、他大学・他学科の学生が集まりプロジェクトを進行していくため、テーマ選定には時間を割かれてしまうのは、致し方ない部分ではあるが、自己評価としてはテーマ選定までに時間をかけ過ぎてしまったと反省している。テーマ選定に関しては、班員同士でよりヒアリングなどを実施し、課題のベースを作成していくなどの配慮などが必要なのではないかと推測する。

取材や文化祭などへのブース出展などの活動は、大学生ならではの視点から、活動の提案ができ、異年齢の方々と交流できたことや、多摩地域への理解・関心を向上することができ、今現在では自分の大きな財産となっている。私は教育学部であり、一見すると本テーマの高齢者とは関係はなさそうだが、多摩地域の現状などを調べることで、地域に基づいた教育実践などを考える根拠となっている。

総合的に考え、1年間多摩地域に関心を持ち、主体的に動けたのではないかと実感している。多

摩未来奨学生プロジェクトで経験したスキルを無駄にすることなく、勉学や今後の人生にいかしていきたくて考えている。1年間ありがとうございました。

松浦 由美子（嘉悦大学 経営経済学部 2年）

多摩未来奨学生としての1年間の活動を通して、地域の課題を知り自分事として考え行動することにとってもやりがいを感じることができました。多摩地域についてより深く知るきっかけとして関心をもって1年間の活動に取り組むことができました。また、地域の方や奨学金関係者の皆様との交流の中で、様々な考え方の方々と出会い議論をしていくことで自分の見識を広めることができたと思います。

この活動の中で得られたものを今後にも活かしていけたらいいなと考えております。1年間ありがとうございました。

シェルパ ミングマ（嘉悦大学 ビジネス創造学部 2年）

多摩未来奨学生として1年間活動させて頂き、私は留学生として日本に来て初めて自分の学校やサークルを飛び出して活動を行った。もちろん、厳しいこと、大変なこともあったけれど、多摩未来奨学生プロジェクトは、身近に日本と日本の習慣を理解する企画でした。はじめはグループワークや活動している時に、日本人の私のグループメンバーは、国際的な問題や地域課題などに強い関心がない学生達だった。しかし、奨学生プロジェクトの活動を通しての経験は、若者の感覚を理解し、これから日本に生きていくためにもとても役立つと思っている。

中間発表会や提言発表会などでは、色々な社長さんや、出会った方達の意見を聞くことがあり、私たちのグループが開催したイベントでも多摩の一般の方々と出会って、地域課題ともに解決についてのワークショップが出来てとても楽しかった。このイベントに参加しに来ていただいた方々にお礼申し上げます。

山村 香織（多摩大学 経営情報学部 1年）

この1年間、多摩未来奨学生として活動させていただき、地域の方との交流ができたことで、本当の地域課題に触れるきっかけとなったと感じています。また、世代を超えたグループディスカッションは、大学の講義だけでは得られない経験であり新鮮なものでした。イベント開催まで様々な準備が必要で、グループの大切さを感じました。大学や専攻が違う学生があつまることで、それぞれの特技や強みが活かせていたと感じます。反省点としては、多摩地域の課題を考える上で情報収集が甘かったところです。資料を見るだけでなく、もう少し地域分析をし議論が深められたと思います。中間報告からのテーマ変更は時間との戦いでしたが、コーディネーターや教授方を含め、地域の方の協力があったからこそ活動でした。新しい価値観に触れる機会をいただき、協力してくれた方々、また1年間一緒に活動してきたグループに感謝します。

渡辺 大智（創価大学 法学部 1年）

多摩地域にある学校に通って12年が過ぎ、このプロジェクトの存在を知りました。多摩地域のことを純粋にもっと知りたいと思い参加しました。何となく通ってきたこの地域には、どのよう

な課題があり、学生の立場からどう取り組んでいくのか、それを考え続けた一年間でした。

他大学、専攻も異なる人たちとのグループワークは、なかなか思うように進まず、「健康・福祉・環境」という幅広いテーマから、ターゲットをどこに置くのかということが一番難しく感じました。それでも、同じ一つの目標に向かって、一つのを何とか作り上げることができたことは、私の一つの自信にもなっています。

グループで取り組んできた、定年後の居場所づくりを、どう描いていくのか。この課題は、誰もが通る道であり、考えなければならないことでもあります。

一年間で、多くの企業や行政、教授の方々との交流する機会を頂き、自分のキャリアについて深めることも出来ました。

本当にありがとうございました。

健康・福祉・環境グループ チームリーダー

江田 有希 (中央大学 法学部 2年)

多摩地域の活性化といってもそのターゲット・方法は様々です。各自の興味や問題意識に基づいた課題探しからターゲットの絞り込み、課題の解決方法の考案と検証と何も決まっていないところから始める、すべて奨学生に任されているという点でやりがいや楽しさを感じつつ、難しさも大きいミッションでした。そのなかで活動を進め提言に達することが出来たのは奨学生のやる気や地域活性化への情熱、また事務局はじめコーディネーターの方々、調査活動やイベントに協力して下さった地域の方々があつてこそです。一年間本当に貴重な体験をし自分自身大きく成長できたことに感謝したいと思っています。

## 担当コーディネーター講評

犬塚 潤一郎 (実践女子大学 生活科学部現代生活学科教授)

大学も学年も、また専攻も異なる学生が集まるこのプロジェクトでは、メンバー個々人の自主性を重んじて、私たちコーディネーターが具体的な目標を定めたり行動の指示を行うことはしません。それだけに、チームとしてのまとまりをいかに早く、また顕密につくりあげられるのかということが、プロジェクトの成果の質を決めることになります。

その意味では、本年度のこのメンバーにとって、チームを形成するに至るまでの期間が長すぎたといえます。共同で討議する機会自体も、時間・内容ともに十分とは言えませんでした。結果的に、プロジェクトのマイルストーンである中間発表でも、最終発表会にても、十分な成果を示せたとは言えません。担当コーディネーターとしても大変難しいものがありました。

とはいえ、成果の質・達成度そのものを求めるのであれば、やりようはいくらでもあるわけですから、集まったメンバーの創発性に期待するこのプロジェクトでは、過程を通して個々人のうちに生まれ成長してゆくものこそが価値なのだと思います。終えたことへの評価を自分なりに下し、客観的な反省のもとに経験を生かされることを期待します。

さて、その学びの過程は次のようなものでした。

取り組むべき社会課題探しでは、「高齢化」というテーマが早々に設定されたのですが、その言葉の意味内容、社会的現実については、多くのメンバーの認識は遠く、事業に結びつけるようなリアリティを持った根拠が提示されません。まず現場に行ってみよう、ということになりましたが、対象不明確なままでは、何がその「現場」であるのかもはっきりしません。介護施設や行政の支援組織を訪問すれば、その具体的な場(組織・制度)の課題や要求を知ることができますが、それに直接的に答えるというのであれば、既存のもののお手伝いにすぎないこととなります。「高齢化」とは具体的にはどのような意味内容を持つのか、課題の本質は何か、と問う、問題発見型プロジェクトの進め方への戸惑いや距離感のうちに時間が過ぎていくようでした。

無為のうちに時をこれ以上過ごすことはできない、というギリギリのところ、「高齢者」と一括りにしないで、そこに社会経営の加担者となりえる大きな層があることに着目し、事業としての形を与えるコンセプト、「シニア世代によるソーシャルビジネス」への絞り込みが決まりました。そしてその実体化へ学生が寄与できる仕方として、「アントレプレナーシップ」の醸成の場の提供、という企画案がまとめられてきました。

本奨学生プロジェクトもそのひとつですが、今日、若者向けの起業教育の機会は少なくありません。アクティブ・ラーニング事例を含め、大学の授業で取り上げられている例も多くあります。一方、企業を定年になったシニア層は、特定の業界・業務でのビジネス経験・知識は豊富にありながら、一般の社会課題に対応した事業を自分で作り上げるという、起業の経験についてはむしろ、学生と同じように乏しいのが現状です。この世代が持つポテンシャルを活かし、社会課題解決にむけて再編することを、学生に身近な「起業学習」機会の共有というかたちで「促進」できないか、そういう事業企画がまとまってきました。大学の研究・教育機能を社会とつなぐ担い手として、学生ができることの可能性も拓けるように見えます。

一方残念ながら、取り組みを深めるよりも早く、期日は訪れます。広報や準備も十分でないままに、試行イベントを開催することになりました。小規模ながらも実施にこぎつけられたことは成果ながらも、その実質は企画・コンセプトの可能性を確認できたにとどまります。

研究プロジェクトを終えてみて、個々のメンバーの心のうちに、不満が残ることをむしろ期待します。何ができなかったのか、達成水準をどう読み違えたのか、等々。

若い人たちへの学びの機会の提供に、多くのご支援を頂いた方々への感謝を幾重にも重ねたく思います。

込戸 雄太 (株式会社キャリア・ママ 営業部部長) 前期

まずはじめに、この講評に奨学生が目を通してくれて教えたことを思い出してもらえればと、そんなことを考えながら書いています。

コーディネーターに就き2期目となった今回、すこし慣れがあったのかも知れません。「去年一度経験したから大体わかっている」と。

しかしながら、人を相手にするという事は、決して毎回同じなんてことはないのだと、今回改めて思いました。

まずもって、全員が集まることができない。メンバーの一部は個々の予定を優先することがある。休んだら休んだで議事録を読んでもくれない。宿題をしてこない。準備をしてないのだから当

然のように発言ができない。行き当たりばったりで、人任せ感が最後まで消えない奨学生もいて、コーディネーターとしてどうしてよいか、もっと介入した方がよいか、自主性を尊重すべきなのか、明確な答えを見出せないまま時間が過ぎてしまいました。

私事により、途中でコーディネーターを変更するに至ってしまったことは残念に感じています。

それでも、最終提言会に参加してみて、皆さんが元気に発表する姿を見ることができ、少しばかり許された気もしました。社会に出て活躍されることを期待しています。またどこかでお会いしましょう！

村田 直美（株式会社キャリア・ママ 管理部部長） 後期

この1年間の多摩未来奨学金プロジェクトの中で奨学生たちは、「大学での学びとは別の様々な気づきと出会い」という大きな経験になったのではないかと思います。自ら考えテーマを見つけ問題提起し、そして行動し結果を導き出すという主体的な行動は、個人だけの意思ではなく、グループで求められ、チーム力の大変さと大切さを感じている様子が見られました。また、その過程では、他大学の大学生はもちろん、教授、地域の方々との出会い、企業とのつながりがはとても価値あるものであり、今後の社会の出るための貴重な経験であつたと思います。今後の活躍を期待しています。

## 参考文献

- [1] 東京都都市整備局、平成21年8月、「多摩の拠点整備基本計画」  
<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/seisaku/tama/>
- [2] 同書、「第2章 多摩地域を取り巻く状況の変化と課題」、p.2（人口の減少・少子高齢化の進行）東京都総務局行政部、平成29年9月、「多摩の振興プラン」  
<http://www.soumu.metro.tokyo.jp/05gyousei/06sinkoutamaplan2.html>
- [3] 同書、「IV 多摩を取り巻く状況」、pp.43-44（高齢者の生活）第1回東京都高齢者保健福祉計画策定委員会【平成29年6月28日開催】および第2回東京都高齢者保健福祉計画策定委員会【平成29年7月24日開催】別冊資料  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kourei/shisaku/koureisayakeikaku/07keikaku3032/07sakutei/iinkai01.html>
- [4] 同書、p.10（年齢階級別 要支援・要介護認定者数と認定率 東京都）
- [5] 多摩ニュータウンでの高齢者支援スペース『福祉亭』の取組 関西大学  
<http://www.kansai-u.ac.jp/ordist/ksdp/danchi/156.pdf>
- [6] 「起業するシニア、世のために働く「ソーシャルビジネス」」、朝日新聞デジタル、2017年9月16日
- [7] [http://www.meti.go.jp/policy/local\\_economy/sbcb/index.html](http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/sbcb/index.html)
- [8] 同報告書には、多摩地区の例も挙げられている。p.41（参考資料5:多摩信用金庫の取り組みについて）多摩地域のコミュニティビジネスの動き、多摩地域中小企業応援センターの対応
- [9] 『地域活性化マーケティング』宮副謙司、同友館  
『ソーシャルデザイン実践ガイド——地域の課題を解決する7つのステップ』寛 裕介、英治出版  
『稼ぐまちが地方を変える 誰も言わなかった10の鉄則』木下 斉、NHK出版新書

## 教育・文化 グループ

多摩のいいね！を発掘しよう  
-SNSを用いた多摩地域振興計画の提案-

### 多摩未来奨学生

大和田 瑞季（桜美林大学 リベラルアーツ学群 2年）  
上條 良太（帝京大学 文学部 2年）  
川村 千夏（多摩大学 経営情報学部 1年）  
黄 悦雋（創価大学 文学部 3年）  
須澤 歩美（法政大学 現代福祉学部 1年）前期のみ  
鈴木 南十星（中央大学 総合政策学部 3年）  
日暮 英里佳（帝京大学 文学部 2年）  
來迎 咲良（玉川大学 経営学部 1年）

### コーディネーター

山本 聡（東京経済大学 経営学部 准教授）前期  
伊藤 智久（明星大学 経営学部 准教授）後期  
深沼 光（日本政策金融公庫 総合研究所 主席研究員）

多摩のいいね！を発掘しよう  
-SNSを用いた多摩地域振興計画の提案-

目次

I 現状と課題.....35

II 問題提起.....36

III 解決方法.....38

IV 動画キャプチャ.....42

V まとめ・提言.....50

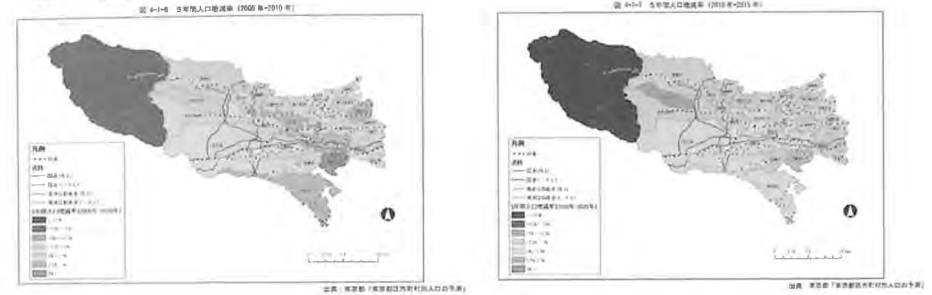
研究プロジェクトを終えて.....50

VI 参考文献（本文掲載順）.....54

I 現状と課題

今日、多摩地域には様々な問題が山積する。そのひとつとして挙げられるのが、将来の人口流出問題である。図1は、財団法人東京市町村自治調査会が2011年に推計した東京都内の市区町村の人口増減率を表している。青色部分は減少、赤色部分は増加、色の濃さはその度合いを示し、濃いほど顕著であることを示している。同図から、2005年から2010年までの5年間の人口増減率（左）に比べ、2020年から2025年の人口増減率予想（右）では、いずれの地域においても人口が著しく減少することが窺える。

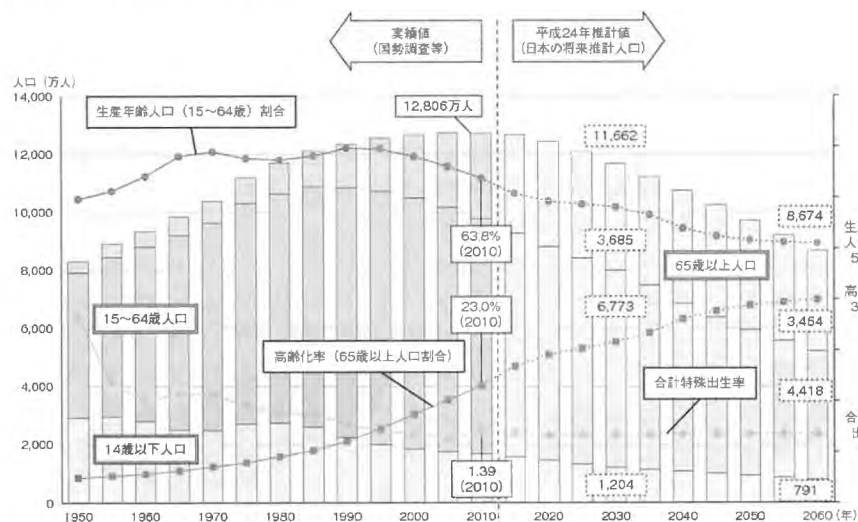
図1 多摩地域の人口流出



出所：公益財団法人東京市町村自治調査会「人口減少期における多摩地域の「縮む」未来図」（2011年）

人口減少は多摩地域だけの問題ではなく、全国的な問題である。総務省は、今後50年にわたる人口推移について、「高齢化率（高齢人口の総人口に対する割合）は2010年（平成22年）の23.0%から、2013年には25.1%で4人に1人を上回り、50年後の2060年には39.9%、すなわち2.5人に1人が65歳以上となることが見込まれている。」と記している（図2）

図2 全国の人口推移と高齢化



出所：総務省「情報通信白書のポイント」(2012年)  
 資料：元データは、総務省「国勢調査」及び「人口推計」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」、出生中位・死亡中位推計(各年10月1日現在人口)、厚生労働省「人口動態統計」。

## II 問題提起

全国的に人口減少が予想されるなかで、多摩地域独特の問題は何だろうか。私たちは、「①大学キャンパスの都心移転」と「②多摩地域在住の大学生の卒業に際しての都心部への転居」の二つではないかと考えた。

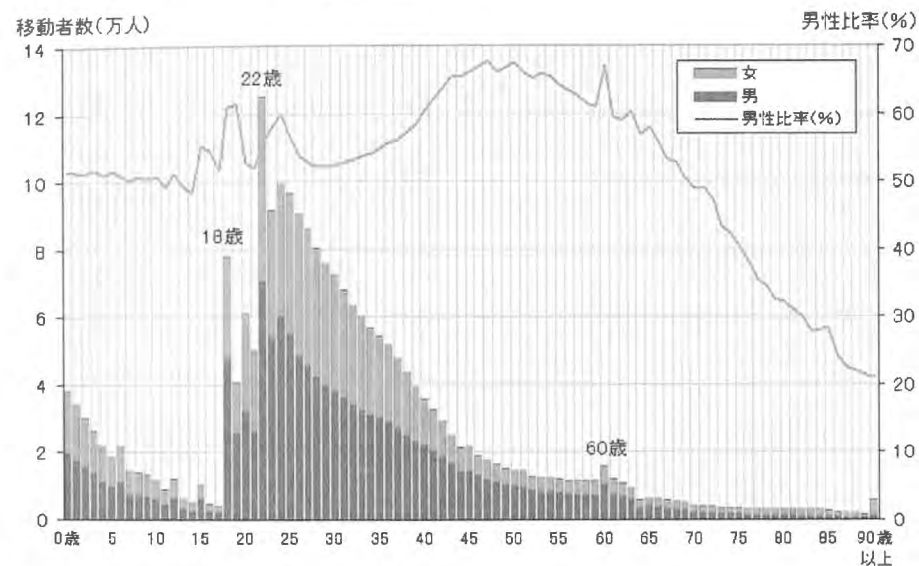
大学キャンパスの都心移転について各大学のホームページから確認すると、まず、2006年に共立女子大学が八王子市から千代田区へ移転、2014年には実践女子大学も日野市にあった2学部と短期大学を渋谷区へ移している(共立女子大学、2006)(実践女子大学、2014)。2016年には、杏林大学が八王子からより都心に近い三鷹市へ、拓殖大学が八王子キャンパスにあった2学部を文教区のキャンパスへと移転した(杏林女子大学、2016)(拓殖大学、2015)。

今後は、2019年に桜美林大学ビジネスマネジメント学群が新宿区のキャンパスへの移転(桜美林大学、2017)、2022年までに八王子市にある中央大学の法学部が文京区への移転が予定されている(中央大学、2017)。以上の流れからわかるように、多摩地域から都心へのキャンパス移転は増加の一途を辿っている。そうすると、やがては大学進学のため、多摩地域へ引越してくる学生は減少していくだろう。多摩地域に生まれ育った学生もキャンパスに近い都心へ流出することが考えられる。必然的に、都心に進学した学生が多摩地域の魅力に触れる機会は少なくなってしまうだろう。

また、図3によると、18歳と22歳で他の都道府県への移動数の多さが顕著であることがみと

れる。18歳は大学進学、22歳は大学卒業の歳である。都道府県ベースのため多摩地域から東京の都心への転居は含まれないものの、傾向として、もともと多摩地域に住んでいた人も、大学進学のために多摩地域へ転居してきた人も、大学卒業後は就職のために他地域へ転居してしまう可能性があることを示すデータである。こうしたことから、一度暮らした多摩地域から離れてしまうことを防ぐには、多摩地域の大学生に、多摩の魅力に気がついてもらうことが重要だと考えた。

図3 高校・大学卒業を機に転居する若者たち



出所：総務省統計局「年齢各歳別年間都道府県移動者数」(2010年)

多摩地域において、魅力を発信する取り組みは、すでに積極的に展開されている。例えば、フィールドワークでは高尾ビジターセンターの「初めての野鳥観察」、武蔵野市観光機構の「ガイドと歩く吉祥寺」が挙げられる(高尾ビジターセンター、2016)。また、視聴覚コンテンツとしては八王子市とデジタルハリウッド大学が共同制作した八王子市の魅力をPRする動画も存在する(デジタルハリウッド大学、2016)。また、東京国体多摩市実行委員会制作の多摩市PRビデオでは、音楽とともに多摩市の四季の風景や名所を紹介している(東京国体多摩市実行委員会、2015)。しかし、それらはおしなべて宣伝が不十分であるように感じられた。創意工夫を凝らしたイベントが多々見受けられる一方で、その告知については地元情報誌やサイトに掲載を行っているのみにみえる。動画はサイトにリンクを掲載、あるいは投稿のみにとどまり、再生回数も思うように伸びていないのが現状である。つまり現状の多摩地域には地域の魅力を見つける「発見力」はあるが、「宣伝力」が足りていないのである。このことから、せっかくの多摩地域の魅力を発信する取り組みは、肝心の「多くの人に見てもらおう」ことが達成できていないことがいえるだろう。

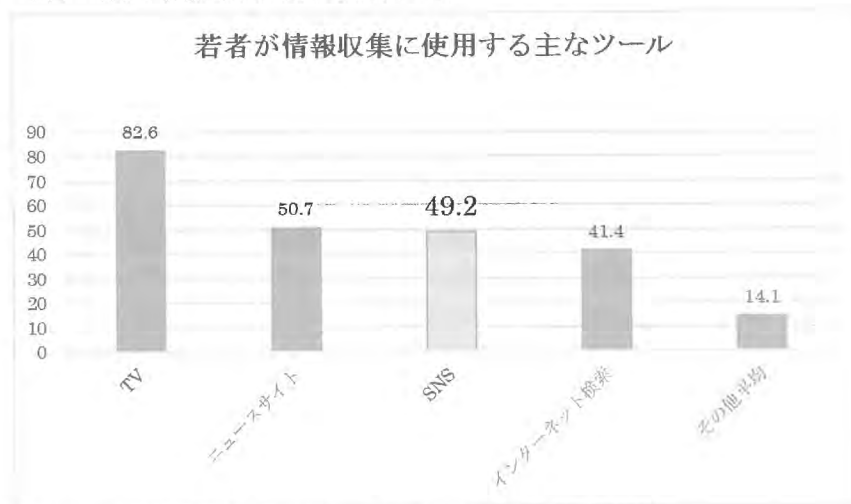
### III 解決方法

そこで、我々と同世代である主に18～22歳の多摩地域の大学に通っている大学生をターゲットとして多摩地域の魅力を発信する手段を考えた。

この層に届く伝達手段としては、SNSを選択が最適であろう。IT用語辞典(<http://e-words.jp>)によると、SNSとは人と人との社会的な繋がりを維持・促進する様々な機能を提供する、会員制のオンラインサービスである(IT用語辞典、2016)。友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供し、趣味や嗜好、居住地域、出身校、あるいは「友人の友人」といった共通点や繋がりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供するものだ。

SNS選択の第一の理由として、近年多くの若者はSNSで時事情報を収集していることが挙げられる。図4によると、若者はテレビ、ニュースサイトに続き、SNSで情報収集をしていることがわかる。

図4 若者が情報収集に使用する主なツール



資料：日本労働組合総連合会「若者の関心と政治や選挙に対する意識に関する調査」(2015年)  
※上位5位の選択肢を抜粋。

第2の理由として、SNSは、とりわけ拡散性の高い媒体である動画を活用できることである。movieTIMESの2015年の調査、「なぜ「動画」なのか？」によると、2013年にインターネット利用者1000人を対象に「シェア(拡散)」「コメント」「いいね(好意的な反応を示す)」の経験を尋ねたところ、いずれの経験も記事と比較して、動画に対して行った割合が上回った(movieTIMES、2015)。

また同調査で、なぜその動画に対してシェアやコメントをしたのかについて「おもしろいと思っ

たから」、「他の人も見たいだろうと考えられるから」、「情報に富んでいるから」等の意見が上位を占めた。これらの結果から、多くの情報が短時間で認識できるという動画の特質が、SNSで拡散されやすいコンテンツとして人々の反応を得られると考えられる。

SNSは瞬間的に反応が集まったとしても、次々に流入する他の情報に埋もれ、持続的に情報を掲示するツールには適さないという難点がある。しかし、情報が動画形式であるには記憶に残りやすい。エドガー・デールが提唱する「ラーニングピラミッド」によると、視聴覚による学習は、文字で情報を学習した場合よりも記憶的着率が高いことを示している(デール、1946)。

図5 エドガー＝デールのラーニングピラミッドにおける視聴覚の有用性



資料：Edgar Dale (1946)「Audio-Visual methods in teaching (1946年)」を参考に筆者作成

私たちは、こうしたSNSや動画の特性を考慮したうえで、「若者に多摩地域の魅力を認識してもらうことを目的として、多摩の魅力を伝える動画を作成し、SNSで効果的に発信する」ことが、課題解決に繋がるという結論に至った。そこで、プロジェクトの一環として、実際に自分たちでモデルとなる動画を制作することにした。

### IV あらすじ・撮影協力店舗紹介

私達は動画を作成するにあたって、動画というツールの機能性だけに頼るのではなく、相手にこちらの意図を汲んでもらえることを目標としてストーリーを考案した。以下に動画のあらすじを

紹介する。

都心で就職活動をする大学4年生・みらい（主人公）は、自己アピールが上手くできず落ち込んでいた。自分の住んでいる多摩地域で、自分の好きなことをするにどうすればよいか、悩んだ末に彼女が思いついた案はYouTuber※になることだった。彼女と同じように就活中の友人2人を巻き込み、多摩モノレール沿線の面白いお店を訪れる内容の動画を作成する。

みらいと友人は協力して、実際に二つのお店を訪問し楽しく撮影を進めた。しかし撮影終了後、みらいは編集に取り掛かるが集中できずにいた。多摩地域の魅力を調べ、実際に訪れて、知ったことによって彼女は、「多摩地域にはこんなにも面白いスポットがあるのに、なぜ知られていないのか」という疑問を抱いたのだ。編集作業を放ってすっかり多摩地域に夢中になっている彼女を見た友人二人は、みらいに「多摩地域の魅力を広めるために、多摩地域で働いたらどうか」と提案する。それが自分に合っていると実感したみらいは、より多くの人に多摩地域のことを知ってもらって多摩地域を訪れてもらうために、多摩地域で働こうと決めるのだった。

※ YouTuber：YouTube上で独自に制作した動画を継続的に公開する人々

上掲のストーリーを採用した理由には、以下の二点が挙げられる。

- ①先行研究との差別化
- ②ターゲットが若者であることの配慮

前段で確認した既存の地域紹介動画は、再生数の伸びも芳しくなく、一視聴者として「最後まで見たい」と感じる要素は少ないのではないかと思えた。そこで、動画を最後まで見てもらうにはどうすればよいかを考慮し、「先が気になる」と思わせるストーリーのドラマという形で多摩地域にあるお店の地域愛・あたたかさを伝えることとした。

またターゲットとする視聴者である若者の誘目性を高めるため、現在話題になっているYouTuberという言葉を用いた。冒頭部分において就活生が突然「YouTuberになろう！」と宣言する場面からはじめることで、インパクトの強さを意識した。

訪問先を比較検討するにあたって、私たちは学校・教育機関が集中している多摩モノレール沿線を歩くフィールドワークを行った。高幡不動駅、多摩動物公園駅、泉体育館前駅の3駅に絞ったうえで担当箇所を分担し、平均して二駅間を徒歩で探索した。店舗関係者との会話を通して、店舗の魅力だけでなく店舗関係者の多摩地域に対する愛着心も実感することができた。そのなかで、特に多摩地域を意識した店づくりをしていると感じた以下の二つの店舗に、撮影への協力を依頼した。

## パン工房HANA

多摩地域で採れた野菜を使用した商品を多く並べていること、多摩動物公園駅から徒歩3分と交通アクセスが便利であることが魅力に感じられた。動画では、店内をじっくりと歩くことでパンをおいしそうに見せる工夫を凝らした。なお、JA東京みなみ農産物直売所「みなみの恵」でも

商品の取扱いがあることも、動画内で告知している。

### 【店舗情報】

住所：東京都日野市程久保8-48-5（多摩動物園ならび）  
 TEL/FAX：042-593-3136  
 アクセス：多摩動物公園駅 徒歩2分  
 定休日：火曜日・水曜日

### イタリアンレストラン カフェドラ・ブーム

「インスタ映え※」という言葉が似合う、おしゃれな雰囲気をもつ店舗を取り入れたいと思い取材対象とした。泉体育館駅から徒歩3分、立川駅北口からも車で7分とアクセスが容易なりゾート風店舗。一番人気の魚介をふんだんに使った「海賊風パスタラーメン」をはじめ、肉料理やハワイ風パンケーキ等バリエーションに富んだメニューが並ぶ。動画にはジャズ・ハワイアン演奏会ならびに芸能人によるトークショー（定期開催）の紹介、さらにオーナーへのインタビューを盛り込んだ。オーナーの兄弟が武蔵村山市役所付近で「パテスリー ドラ・ブーム」という洋菓子店を営んでいることも、動画内で告知している。

※インスタ映え：写真や動画を投稿するSNS「Instagram」（インスタグラム）で「映える」（フォトジェニックである）さまを指す造語

### 【店舗情報】

住所：東京都立川市柏町1-5-4  
 TEL/FAX：042-534-6541  
 アクセス：立川駅北口 車で約7分  
 泉体育館駅から208m  
 定休日：11:00～23:00 年中無休

## IV 動画キャプチャ

### 冒頭



周りに合わせて就活をするも、自分に合った企業が見つからない大学4年生・みらい(主人公)。もっと自分の好きなことを仕事にしたい。自分の好きな環境で、好きなことをしたいと思悩む。  
悩んだ末に YouTuber になろうと決意する。

(明星大学構内で撮影。多摩の町並みが一望できる場所を選定し、動画内で効果的に使用した)



「この中に多摩モノレールの駅名が書かれたくじが入ってて、くじを引いた人はそこに書かれた駅周辺で面白いスポットを探すの。どう？面白そうでしょ」  
その言葉に「くじを引いた人って……私たちもやるの!？」と驚く親友二人。



突拍子もない計画を聞いて友達は驚くばかり。  
「せっかくこの多摩地域に住んでるんだから、広い場所で大胆なことをして一発儲けたい」というみらいの言葉に、親友のしょうこは「そんな大胆なことできるお金はあるの?」と疑問に思う。  
そこでみらいはお金が無くてもできる面白い企画を考えてきたと言いながら、くじを取り出す。



「面白いところ見つけたよ!」と言うしょうこの言葉に対し、みらいは早速撮影に行こうという。  
撮影も一緒に行くことを知らなかったたまこは驚く。



みらいが熱心に読んでいるのは、YouTuberのバイブル「YouTuberの心得」。

(当該シーンではネットワーク多摩のご厚意により撮影小道具としていただいた多摩未来奨学金のポスターを用いた)



みらいのペースに乗せられて友達のしょうこことたまこは多摩モノレール沿線の駅名が書かれたくじを引いて担当の駅を決めることになった。  
たまこは「高幡不動」、しょうこは「多摩動物公園」、みらいは「玉川上水」。  
壮大なYouTuber計画は、どうなってしまうのか。



「3人でトリオを組むわよ！最強のユーザーバーに、私たちはなる!!!!」と高らかに宣言。

## 2.店舗撮影① パン工房HANA



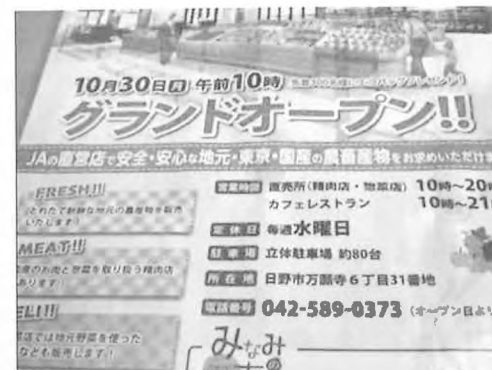
さっそく動画撮影が始まった。この日はしょうことみらいの二人での撮影となった。一軒目のお店は多摩動物公園駅から徒歩2分にあるパン工房HANAである。



動画作成が始まってテンションが高いみらい。お腹を空かせながら店内に向かった。



店内に入るとパンの香ばしい香りが漂う。多摩の野菜を用いたピザパンや人気商品のウィンナーロールをはじめとする種類豊富なパンが並ぶ。



みらいは多摩動物公園駅の近くに住んでいる人はいつでも美味しいパンが食べられると羨ましい気持ちになった。その言葉を聞いてお店の人がJA東京みなみ農産物直売所「みなみの恵」でも商品を買うことができると教えてくれた。



### 3.店舗撮影② カフェ ド ラ・ブーム



この日はたまことみらい二人での撮影となった。  
 続く二軒目のお店は泉体育館駅から徒歩3分にあるカフェ ド ラ・ブームである。



どんな料理が出てくるか楽しみな気持ちで、店内に向かった。



店内に入ると禁煙用と喫煙用の2つの空間があった。今回はシックでおしゃれな空間の喫煙の方で撮影した。  
 壁にあるボードにはお勧めのデザートや食べ物が書かれてあり、ジュークボックスもあった。



このお店ではオーナーである立石さんにインタビューすることができた。  
 Q. なぜ多摩地域でお店を始めたか？  
 A. 元々の生まれが立川だったから。また、若いころに立川で町おこしとしてお店を開きたいと思ったから。今も地元を盛り上げたいと思っている。  
 弟さんが武蔵村山の市役所の傍にパテスリー ド ラ・ブームと言うげんこつシューやロールケーキが売りなので、そちらもよろしくお願いします。

### 4.ラスト



撮影を終えて、どんな編集がされているのか楽しみだと話しながらたまことしょうこが歩いてきた。



一方、みらいは動画編集に没頭している…はずが、多摩地域のガイドブックに興味津々。この前まで読んでいた「YouTuberの心得」はカップラーメンの重し…？



たまこがわけを聞いてみると、難しい編集作業に心が折れた模様。しかもみらいは撮影を通して、「多摩には面白いスポットがあるのに、なぜあまり知られていないのか」という疑問を感じていた。



それを聞いたしょうこは、多摩の魅力を広めるために多摩の企業に就職することを提案。みらいは就活を続けることを決断する。しかしみらいは今回の騒動(?)を通して、「地元を愛する」就活生へと変わっていたのだった。



「たくさんの人に多摩のいいところを知ってもらって、たくさんの人に多摩を訪れてほしいね」というたまこの言葉。

### 5. エンドロール



出演者ならびに撮影協力者をまとめた。当映像のためのオリジナル主題歌「さがしもの」をテーマソングとして使用した。

## V まとめ・提言

昨今の多摩地域における人口減少は、深刻な問題となっている。さらには将来にわたって、多摩地域人口の減少率は高まると推定される。多摩地域に住む「若者」の流出は特に顕著である。キャンパスの都心移転がそれを加速する可能性がある。また、多摩地域で生まれ育った若者たちが長い通勤時間を嫌って、より都心の近くへと転出しているとも推測できる。

これらの現状を鑑みるに、若い世代が多摩地域を離れていくことは、自分たちの地域の魅力を知らないことに起因するものだと思う。多摩地域をPRする要素は多く、実際の取り組みも積極的に展開しているにもかかわらず、宣伝拡散が不十分で認知度が低いことも課題といえる。そこで私達は「若者に多摩地域の魅力を認識してもらうことを目的として、多摩の魅力を伝える動画を作成し、SNSで効果的に発信する」ことを提言したい。

提言に当たっては、実際に自分たちでモデルとなる動画を制作した。実際に多摩モノレール沿線を歩くフィールドワークを行うことで、多摩地域にある店舗の雰囲気や地域への思いを聞き、それらを動画に反映させながら撮影を行った。インパクトのある大きなストーリーのなかに私達の伝えたい意図を組み込むことによって、作品としての面白さも追求したつもりである。

今回のプロジェクトは、メンバーの専門分野・得意分野を活かしながら行った。最後に出来上がった私達の映像作品を通して、多くの人々、特に若い世代に多摩のいいところや魅力を感じてもらえれば幸甚である。

### 提 言

若者に多摩地域の魅力を認識してもらうことを目的として、多摩の魅力を伝える動画を作成し、SNSで効果的に発信する。

## 研究プロジェクトを終えて

来迎 咲良（玉川大学 経営学部 1年）

長いようで短かったこのプロジェクトの一年間で、私は大学では学べないことをたくさん知ることができました。特に大事だと感じた二つのことをここで紹介したいと思います。

一つ目は、多摩地域の良さです。申込時の私は多摩地域のことをしっかりと把握していませんでした。しかし、プロジェクトを通して多摩地域について調べ、実際に歩いたことにより、地元のような安心感を覚えました。それだけでなく、多摩地域が好きで多摩地域で働いている人に多く出会って話したことで、多摩地域が愛されている場所なのだと感じました。

二つ目は、繋がりを大事にすることです。自分の考えを他人に伝えるのが苦手だった私は、初めのうちはひどく緊張していました。しかし、コーディネーターの先生や同グループの先輩方が優しく支えてくださったので、安心してプロジェクトに取り組むことが出来ました。また、私た

ちが行った多摩地域の魅力を伝えるドラマの撮影という企画は、一人では決してできないことです。様々な人と信頼関係を築くこと、それからその関係を大事にすることの重要性を強く実感しました。

川村 千夏（多摩大学 経営情報学部 1年）

1年間、多摩未来奨学金を通して多くのことを学び、また、成長することができました。このことについて述べたいと思います。

私は、多摩地域の問題について深く考えたことがなく、どのような問題を抱えているのかという知識が不十分でした。しかし、このプロジェクトに参加して多摩地域では人口減少や少子高齢、雇用の問題など多くの問題を抱えている事を今回プロジェクトに参加して分かりました。また、この問題に対して取り組んでいる方々の生のお話も聞くことができ、より具体的に学ぶことができました。この学んだことを、今後の大学生活や就職に必ず活かしていきたいと思っています。また、多摩地域がより活性化できるように貢献する活動をしたいと思っています。

成長については、多摩未来奨学金を始める前は人前で話す事と自ら行動することがとても苦手でした。しかし、このプロジェクトに参加して多くの人と関わることで前よりも人前で話すことが苦手ではなくなりました。また、初めの頃は自ら行動することができず人任せになってしまう面が多かったです。しかし、途中からこのままではダメだと思い、行動するように努力しました。その結果、前よりも自ら行動することができるようになりました。

これらのことから、私は多摩未来奨学金に参加して多くの事を学び成長することが出来たので参加して本当に良かったです。また、この貴重な経験を今後必ず活かしたいと思っています。

黄 悦雫（創価大学 文学部 3年）

1年間を振り返ると、長いようでとても短い1年でした。日本に留学に来て、自分の住んでいる地域は自然が非常に豊かで、人はとても優しいと感じています。もっとこの地域を知りたいと思い、この多摩未来奨学金に応募しました。私も多摩の大学で勉強していますが、多摩地域を離れてしまう大学生が多いと実感していました。そのため、私たちのグループは多摩地域の魅力を発信することを考えました。私たちは学校が集中している多摩モノレール沿線をじっくり歩いてみました。そこで、色々なお店を探したり、お店の人と話したりしました。お店の魅力だけではなく、お店の人の多摩地域に対する愛着心も実感しました。1年間で多くの人々と出会い、学び、様々なことが勉強になりました。今後は社会人として、今回の活動で勉強したことを活用し、努力して日々を過ごしていきたいと考えます。1年間本当にありがとうございました。

上條 良太（帝京大学 文学部 2年）

多摩未来奨学金の活動を通して、活動開始当初よりも多摩地域の活性化を願う気持ちが強くなった。それだけでなく、多摩地域が活性化するための方法をコーディネーターの先生方やグループのメンバーと議論し考えることができた。また、多摩モノレール沿線を歩くなどのフィールドワークを行い、手間を惜しまず自分の足を使って調査をしなければ分からなかったことがあった。その中で私は、身近なものに対して一度立ち止まって調査し当たり前を疑うことの大切さを知った。

長く住んできた多摩地域に当たり前の風景と化していた場所、フィールドワークを行うことで今まで知らなかった歴史や社会的背景、多摩地域の魅力がたくさん詰まったお店を発見することができた。

本活動を終え、私は特に行動力を身に付けることができた。そして疑問に思ったことはすぐに調べる、身近なものを疑う、他人と意見交換をすることで自分なりの答えを見つけることができるということを学んだ。今後も多摩地域の活性化について考え、行動に移していきたい。

大和田 瑞季(桜美林大学 リベラルアーツ学群 2年)

私は1年間活動して、今まで以上に多摩地域が好きになった。多摩地域の良い所を無意識に探すようになり、自分が参加する別の活動でも多摩の良さを広めることはできないかと思うようになった。

また、多摩地域で行われたイベントに参加した際も多摩の魅力に触れ、新しい知識を付けることができた。多摩でのイベントについて調べることは今まで無かったし、1人で行こうとも思わなかった。しかし、プロジェクトの活動内で多摩地域のイベントを知り、多摩地域に興味があるメンバーと行くことができ、有意義な時間を過ごすことができた。

会った当初はメンバー同士初対面でお互いが緊張していた。しかし、今ではプロジェクトが終わり、会う機会が減るといっただけで寂しさを覚えるほど仲良くなった。楽しいことはたくさんあったが、辛いことも多かった。きっとそれを乗り越えてきた仲間だから寂しいのだと思う。

そう思える仲間に出会えたこと、多摩をより好きになれたこと、そのような機会をくださった多摩未来奨学金、及び支えてくださる方々には非常に感謝しています。

ありがとうございました。

鈴木 南十星(中央大学 総合政策学部 3年)

本プロジェクトを通じて、チームで行動する際に必要な経験と知識を肌感覚として得られたことが個人の最大成果と言えるが、一方で多摩地域の発展のために貢献するという鳥瞰した視点での成果は大きくなかったのではないかと考えられる。プロジェクト全体の振り返りや問題意識に立ち返ってのフィードバックに割く時間が少なかったことが最大の原因ではある。しかしながら、地域社会が抱える問題を掘り起こし、提示し解決策をひねり出すという大きな結果に向けた過程のために様々な経験をすることができたことは個人として貴重な財産になった。

教育・文化グループ チームリーダー

日暮 英里佳(帝京大学 文学部 2年)

当プロジェクトを進めていく中で、共同研究の面白さ・難しさを知ることができた。メンバーが全員納得できるような形のものを作り上げることは、今までに経験のない取り組みだった。ときには最善の方法がわからず戸惑うこともあったが、密に連携を取り合っただけで完成にこぎつけた。なによりネットワーク多摩・協賛企業各位・コーディネーターの先生方のご尽力がなければならぬものだったと実感している。

また、授業内で地域について調査する経験はあったものの、地域の「振興」に目を向ける機会

は少なかった。様々な分野を専攻するメンバーが集うことで、自分にはなかった新しい視点を取り入れながらの活動となった。最終的に求められた期待値に届かなかったことは心残りに思うが、自分が生まれてから今までお世話になった多摩地域の発展に少しでも貢献できたなら光栄である。

## 担当コーディネーター講評

伊藤 智久(明星大学 経営学部 准教授) 後期

深沼 光(日本政策金融公庫 総合研究所 主席研究員)

今回のプロジェクトを進めるに当たり、毎年のことではあるが、当初は何をするかの企画がうまくまとまらず苦労した。その過程で、新鮮みのある企画を立案するには、既存のプロジェクトを十分に検討したうえで、例えば紹介される店舗の経営者や動画の視聴者など、そこに関与するそれぞれの人たちにとってメリットがあるものにする必要があることを、理解できたのではないだろうか。動画撮影の方針決定後も、肖像権や著作権の問題や、撮影許可の必要性など、動画を公式なものとして発表するには、さまざまなハードルがあることも分かったと思う。

動画コンテを掲載することで、最終報告書は非常に分かりやすいものとなった。少し残念だった点をあげるとすれば、企画検討の過程で調べた多くのことが、構成の都合で報告書にすべては反映できなかったことである。

この一年間のプロジェクトを通じて、メンバーそれぞれが、チームで作業を行うことの楽しさと難しさを実感できたのではないだろうか。今回の経験は、必ず各人の将来の糧となることだろう。

最後に、快く撮影にご協力いただいた二つの店舗の経営者・スタッフの方々と、明星大学での撮影場所確保など、多くの面で学生をサポートといただいたネットワーク多摩事務局、そして奨学金の運営のためにさまざまなご協力をいただいた地元企業の皆様に、改めて御礼申し上げる次第である。

山本 聡(東京経済大学 経営学部准教授) 前期

学生はなぜ、周囲からの支援を得ることができるのでしょうか。それは学業や課外活動を通じて、社会に貢献できる人物になることを期待されているからです。未来奨学金もそうした支援の一つであり、地域の企業が日々大変な苦労をしながら、稼いだ金銭を地域の学生に奨学金として、提供してくれているものと考えます。

皆さんがそうした期待に応えようという意識をどのくらい強く有していたのか、また、どのくらい真摯な姿勢で課題や活動に対峙しようとしたのか、その答えや評価は最終的には他人から与えられるものではなく、皆さんが自分自身の心の内と語り合っただけで、見つけるべきものと考えます。

自分達の活動や姿勢がどうだったか、その中で何を考えたのかを真摯に振り返り、自分自身を評価して欲しいと考えます。その評価をどれだけ真剣にできるかが、今後成長できるか否かにつながるものと考えます。

## VI 参考文献（本文掲載順）

- [1] 総務省（2012）総務省ホームページ「情報通信白書のポイント（2012年）」  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc112120.html>
- [2] 総務省（2010）総務省統計局ホームページ「住民基本台帳人口移動報告 平成22年詳細集計結果（2010年）」  
<http://www.stat.go.jp/data/idou/2010np/shousai/youyaku/index.htm>
- [3] Business Journal(2016)「こぞって郊外移転した大学、今度はこぞって都心へ移転…深刻な事態に陥る懸念も（2016年）」  
[http://biz-journal.jp/i/2016/02/post\\_13858\\_entry.html](http://biz-journal.jp/i/2016/02/post_13858_entry.html)
- [4] 実践女子大学（2014）実践女子大学ホームページ「実践女子大学・実践女子大学短期大学部の2校地化について（お知らせ）（2014年）」[http://www.jissen.ac.jp/notice/year2014/20140401\\_nyu1.html](http://www.jissen.ac.jp/notice/year2014/20140401_nyu1.html)
- [5] 杏林大学（2016）杏林大学ホームページ「2016年4月三鷹に新キャンパスを開設、八王子キャンパスの学部・大学院を移転（杏林大学トップ）（2016年）」  
<http://www.kyorin-u.ac.jp/cn/html/kyorin/00003/201304163/>
- [6] 拓殖大学（2015）拓殖大学ホームページ「沿革（大学案内）（2015年）」  
<http://www.takushoku-u.ac.jp/summary/history.html>
- [7] 桜美林大学（2016）桜美林大学ホームページ「新宿キャンパス2019年4月移転（予定）（クイックリンク）（2016年）」  
<https://www.obirin.ac.jp/shinjuku-campus/>
- [8] 総務省統計局（2010）総務省統計局ホームページ「年齢各歳別年間都道府県移動者数（統計データ）（2010年）」  
<http://www.stat.go.jp/data/idou/2010np/shousai/youyaku/index.htm>
- [9] 東京国体多摩市実行委員会（2013）「多摩市PRビデオ（2013年）」  
<https://www.youtube.com/watch?v=EB6A3KfmjI0>
- [10] IT用語辞典（2017）「SNS【Social Networking Service】（2017年）」  
<http://e-words.jp/w/SNS.html>
- [11] movieTIMES（2015）「なぜ「動画」なのか？—動画が持つ4つの価値を知り、動画マーケティングの効果を最大化する（2015年）」  
<http://www.movie-times.tv/basic/7098/>
- [12] 日本労働組合総連合会（2015）「若者の関心と政治や選挙に対する意識に関する調査（2015年）」  
<https://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/20150803.pdf>
- [13] Edgar Dale（1946）「Audio-Visual methods in teaching（1946年）」  
<http://teacherworld.com/potdale.html>
- [14] パン教室&パン工房 HANA（2017）パン工房&教室 HANA 公式ホームページ「お店のご案内（2017年）」  
[http://hana1992.com/?page\\_id=2](http://hana1992.com/?page_id=2)
- [15] cafe de La Boum（カフェ ドラ・ブーム）イタリアンレストラン（2017）cafe de La Boum（カフェ ドラ・ブーム）公式HP「メニュー・イベント・アクセス（2017年）」  
<http://cafedelaboum.com/>

## 環境・産業 グループ

### 『生業（なりわい）プロジェクト』

～多摩地域で見つける、自分の生き方、働き方～

#### 多摩未来奨学生

市川 紗雪（法政大学 社会学部 1年）  
大橋 奈紗（多摩大学 経営情報学部 2年）  
木下 萌（法政大学 社会学部 1年）  
熊谷 健太郎（亜細亜大学 法学部 3年）  
富永 茉衣（拓殖大学 工学部 3年）  
長島 美月（帝京大学 法学部 1年）  
中村 光弘（創価大学 経営学部 3年）  
八村 美璃（中央大学 法学部 2年）

#### コーディネーター

糸久 正人（法政大学 社会学部 准教授）  
本山 良樹（多摩信用金庫 価値創造事業本部 地域連携支援部 主任調査役）

## 目次

1. 課題設定	57
2. 現状把握	60
3. 仮説	66
4. 実証	69
5. 政策提言	76
研究プロジェクトを終えて	80
6. 参考文献	84

## 1. 課題設定

## 多摩地域の現状

私たちの学ぶ多摩地域は、現在54校もの大学や短期大学（以下、大学等）が立地しており、それらへ通う学生数はおよそ18万人と、他地域に比べても非常に多いという特性を持っている。1各市には学生向けの施設やサービスが多くあり、多摩地域全体がひとつの学生街のようなイメージがある。

そんなイメージの傍ら、近年では、多摩地域で学ぶ学生が多摩地域に就職という形で定着せずに域外に流出していることが大きな課題となっている。データによると、多摩地域の大学等へ通う就職学生のうち、多摩地域へ就職した学生は全体のわずか4%（図1）にとどまっており、大学等の入学期に人口が急激に増加するものの、就職期には多摩地域から流出していることが読み取れる。（表1）<sup>2</sup>

多摩地域は、ものづくりを中心に唯一無二の技術を有し、大手企業の手が届かないような独自のビジネスモデルを展開している中小企業が数多く集積しており、そのような中小企業が地域の雇用を産み出し、地域経済を下支えしているという側面がある。しかし、これらの中小企業が地域経済において大きな役割を果たしている一方で、その中のおよそ半数の企業が、地元からの新卒採用に積極的であるにもかかわらず、十分な新卒採用ができていないという事実も存在する。データによると、新卒の採用計画がありながら、採用充足率が80%以上であると答えている中小企業は3割程度であり、内定者が0と答える企業も4割を超えている。（図2）<sup>3</sup>ほぼ同時期に行われたデイスコによる調査では、上記調査と同規模の企業の充足率は全国平均で70.8%となっており、多摩地域の採用充足率が全国的にも低調であることが明らかとなった。（表2）<sup>4</sup>

このような多摩地域における就職学生、特に中小企業における就職学生の流出問題が、対症療法的に解決できる問題ではないことは、これまで多摩未来プロジェクト始まって以来、3年連続で当チームが当該問題を取り上げ、政策提言を行ってきたことから見て取れる。人口変動や進路希望など、コントロールの効かない状況と長期的に向き合う必要があるこの問題に対して、根本的に解決する方法を見つけることは極めて難しい。しかしながら、プロジェクトのはじめに当チームで課題設定について議論した結果、解決の需要が高く、根強い問題となっているからこそ、流出主体である私たち学生が、この問題に向き合い続けなければならないのではないかと結論に至った。そこで、私たち今年度の企業・産業グループも「多摩地域の中小企業への就職学生をいかに増加させるか」という課題を設定し、プロジェクトを進めることとした。

1 「多摩地域データブック～多摩地域主要統計表～2016(平成28年)版」 p65

2 平成25年度 八王子市住民基本台帳

3 多摩大学地域活性化マネジメントセンター、多摩信用金庫「2015年度 多摩地域の採用等実態調査」p59

4 同資料 p61

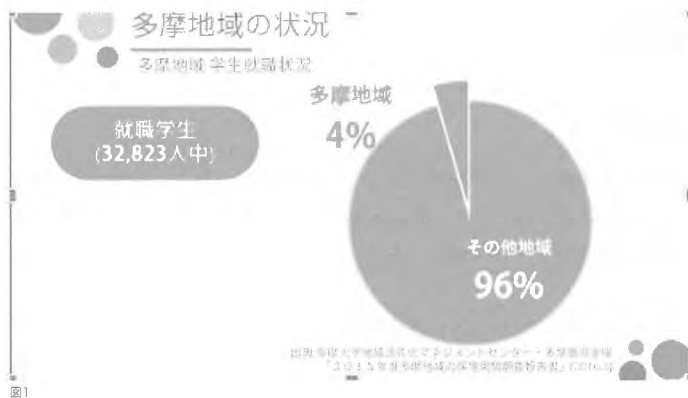


図1

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント	
有効	0%	82	40.2	44.3	44.3
	0%超～30%未満	13	6.4	7.0	51.4
	30%以上～50%未満	17	8.3	9.2	60.5
	50%以上～80%未満	29	14.2	15.7	76.2
	80%以上～100%未満	12	5.9	8.5	82.7
	100%以上	32	15.7	17.3	100.0
合計		185	90.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	19	9.3		
合計		204	100.0		

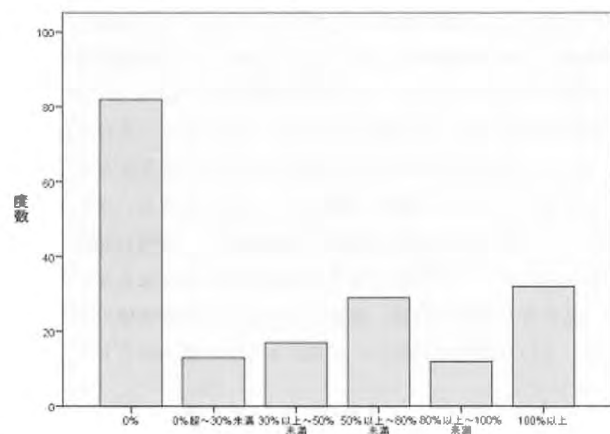


図2

## 八王子市の年齢構成

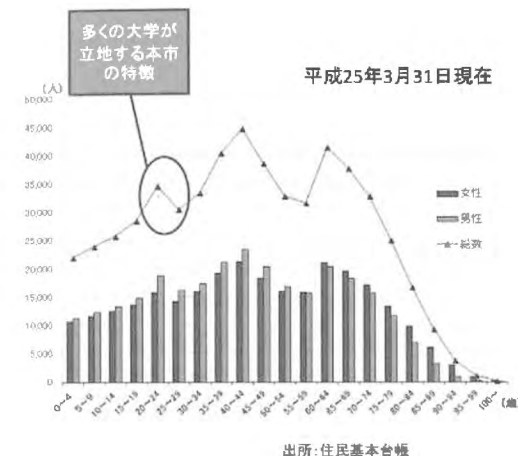


表1

(出典: ディスコ調べ (2015年9月状況))

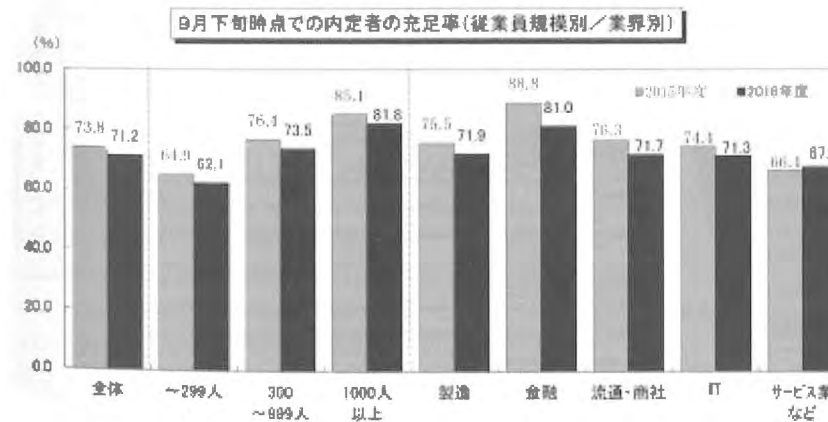


表2

## 2. 現状把握

はじめに、ヒアリングやアンケートを用いて、多摩地域の行政、企業、学生の現在の状況を調査した。その結果をもとに、多摩地域の中小企業と学生を繋いでいくためにはどのような方策を練ることができるのかについて検討することとした。

### (1) 行政について

#### 八王子市役所の方々からのヒアリング

2017年3月13日に「サイバーシルクロード八王子」(八王子市明神町2-27-6 たましんブルームセンター4階)にて、八王子市産業政策課の三吉氏、川村氏から八王子市の取り組みについて伺った。

八王子市では、「産業振興マスタープラン」を策定しており、「魅力あふれる産業でにぎわう活力あるまち」の実現のために「地域経済を支える産業の振興」「まちの活力を創出する産業」「まちの魅力を向上させる産業の振興」という3つの基本施策をもとに様々な取り組みを行っている。市の産業分野から、まちの活性化を目指すというグランドデザインについて、詳しく伺った。(図3)<sup>5</sup>

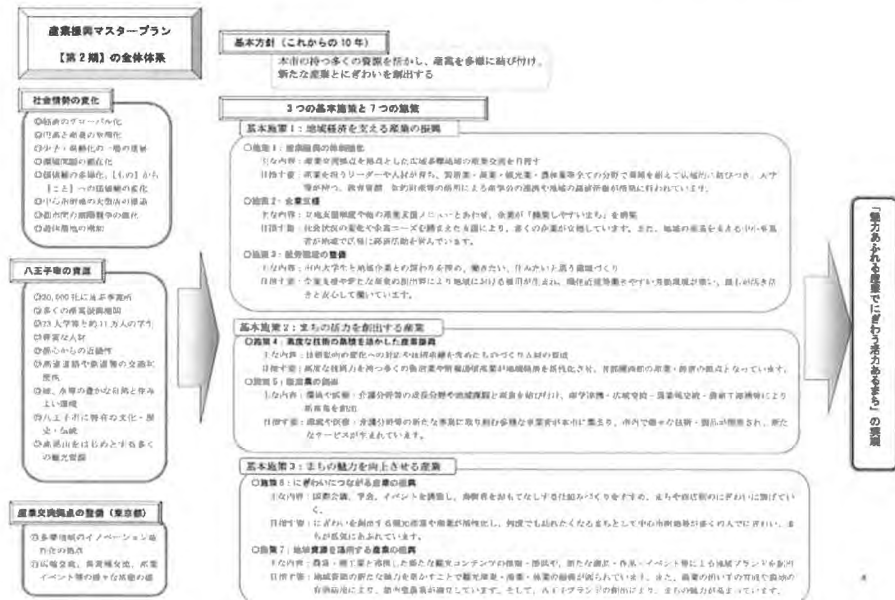


図3

また、八王子市では人口減少社会に対する取り組みとして、以下のような「八王子市シティプロモーション基本方針」を策定している。ここでは、ターゲットを市内外の若年層(20代から30

<sup>5</sup> 「八王子市産業振興マスタープラン【第2期】」

代)と大学生とし、目指すまちの姿を設定している。

- 市内の若年層にとって「住み続けたい」と思えるまち
- 市外の若年層にとって「住んでみたい」と思えるまち
- 市内の大学生にとって「このまちが好き」と思えるまち

以上の目標を掲げ、八王子市では活力あるまちづくりを目指している。しかし、「学生目線の意見が欲しい。学生がどのように考えているかがわからず、私たち以外の多摩地域の市の職員は困っている」と、職員とはやや年齢の離れる若者目線で政策を考えていくことに対して、市としての難しさを感じていることが窺えた。

その一方で、既に若者に対して取り組んでいる産業施策として、①販路開拓支援、②産学連携による研究・開発費等補助金、③MICE(マイス)、④若者奨励金がある。<sup>6</sup>

#### ① 販路開拓支援

市内の中小企業の新たな販路開拓を支援するため、国内外の展示会への出展費用の一部を補助している。また、補助対象企業で希望がある場合は、市が派遣する展示会出展アドバイザーから効果的な展示方法などについて無料でアドバイスを受けることもできる。時間的・金銭的余裕がなく、自分たちだけでは販路を拡大することのできない中小企業に対して市が支援する取り組みである。

#### ② 産学連携による研究・開発等補助金

市内で操業する中小企業と大学や公設研究機関による産学連携の研究・開発費用の一部を補助するもので、平成26年度から実施している。中小企業における技術的課題の解決や技術の高度化・製品の付加価値化による競争力の強化を図り、市の産業の活性化に資することを目的としている。

#### ③ MICE(マイス)

Meeting：企業の行う会議や研修

Incentive travel/ tour：企業等の行う招待旅行

ConferenceまたはConvention：国際的機関・団体が行う国際会議や学術会議

ExhibitionまたはEvent：展示会や見本市、イベント

の4つの頭文字をとったものがMICEである。MICEは、一般的な観光旅行よりも多くの集客が見込まれ、その上消費額も大きいことから、地域の経済的効果は非常に大きいとされる。そのため、市もその開催のために核となる施設の整備や、その周囲の宿泊施設の充実を図り、若者の巻き込みを図っているという。

#### ④ 若者奨励金

<sup>6</sup> 八王子市公式ホームページ

「はちおうじ就職ナビ」に掲載されている中小企業に就職した市内在住の若者（高校・大学・短期大学・専門学校等を卒業して3年以内）を対象に、奨励金として10万円を交付する制度である。市内在住の若者に、就職先の選択肢として地元の中小企業を視野に入れてもらうという点で有効な政策である。

以上のとおり、市として産業の活性化から市全体の活性化を目指すための取り組みが既にいくつか行われており、中でも「若者奨励金」のように学生の地元八王子への就職支援に直接的に力を入れている政策が存在することも分かった。当チームのメンバーでも、話を伺うまでこれらの政策を知っている者は一人もいなかったことから、行政と学生の温度差を実感した。

## (2) 企業について

### ア. 電話調査の実施

次に、多摩地域の企業における採用状況の実際を把握するため、2017年10月に企業アンケートを実施した。チームのメンバーがそれぞれ10数社ほどを担当し、多摩地域で活躍する中小企業の優れた技術やビジネスモデルを表彰する多摩ブルー・グリーン賞の受賞企業を中心に、当チーム独自で作成した電話によるアンケートである。対象企業は計75社、集計可能企業数は64社であった。

#### 【アンケート内容】

- ① 新卒を募集しているか
- ② 新卒を募集している場合、その採用活動は満足にできているか
- ③ 採用活動が満足にできていない場合、それはなぜか
- ④ どんな人材が必要か
  - ・多摩地域の大学で考える場合、どの大学がターゲットか
  - ・分野や専攻、理系・文系など
  - ・新卒者に求めるものは何か、重点を置きたいポイントは何か
- ⑤ 現在どのように新卒採用を行なっているか
- ⑥ インターンシップ(以下、「インターン」)を実施したことはあるか

#### 【アンケート結果】

①について、新卒を募集している企業は27社であり、その他の企業は新卒を募集していなかった。新卒を募集していない企業は、中途採用のみ行っている、または採用自体を現在は行っていない企業である。なお、新卒を募集している企業の中で採用状況に満足していると回答した企業は14社であった。

②については採用を行っている企業の9割が満足しておらず、③の満足していない企業の理由としては、以下のようなものがあった。

質の高い学生を採用するために採用基準を高めたところ、結果として採用数が少なくなった。(求めるレベルの学生が応募してくれない)

いくらインターンや説明会を行っても、学生が来てくれない。

小さな会社なので本当は学校にお願いしたいが、学校と連携を取るような時間的・経済的余裕がなく、結局ハローワークや求人広告での募集になってしまう。

④については、29社からの回答が得られたが、10社が理系やIT関係、工学系の学生、などというターゲットを掲げていた。一方、19社は理系文系問わず「やる気のある人」「即戦力になる人」であれば良い、と回答した。即戦力を求める背景としては、会社の規模ゆえに、教育・研修体制が整っていないことも原因になっているものと推察される。

⑤については、回答した企業の中ではハローワークや商工会・商工会議所を利用、大学での学内説明会への参加などが大半であり、マイナビやリクナビといった大手就職情報サイトを利用している企業も少数いたが、その効果はそれほど出ていないという声があった。また、中小企業の合同説明会の来場者には採用したいレベルの学生が少ないため、参加をやめたという企業も存在した。

⑥については、インターンの実施について回答した34社のうち、19社が実施したことがあり、15社がしたことがないと回答した。実施していたが採用に繋がらず、現在では行ってないという企業も存在した。また、実施したくてもノウハウがないと答える企業もあった。

### イ. 中小企業イベントへの参加とインタビューの実施

中小企業の生の声について調査するため、2017年9月13日に公益財団法人東京都中小企業振興公社主催の「平成29年度 新技術創出交流会」に参加した。全162社の中小企業がブース展示を行っており、各企業が来場者に対して自社のパンフレットや、無料で自社製品の配付などを行っていた。その中で多摩地域の中小企業における大学生や新卒採用に対する生の声を集めるべく、参加企業の30社にインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の結果、イベントに参加していた企業のうち80%は新卒採用を希望しておらず、中途採用もしくは高等専門学校などの専門性の高い学生を求めていた。これは、イベントに参加している企業の属性が、専門性の高い技術系であることが大いに関係しているとみられる。残りの20%にあたる33社は新卒採用を希望しているが、マッチングできている企業は1社のみであった。多くの原因は中小企業の認知度が低いことや採用にコストをかけられないことなどが挙げられた。

A社では関連会社と共同で「デュアル・システム」を導入し、システムを通じて能力・適性を見極めたうえで正規採用している。だが知り合いを通しての周知方法しかなく参加者も少ないと言う。だからといってこういったシステムやインターンなどを介さず入社した新卒者はすぐに辞めてしまうこともあるとのことであった。つまり、認知度の低さが原因となっており、新卒者と企業のマッチングが上手くいかない状況が生まれているという。

また、K社ではハローワーク主催の就活イベントに毎年参加しているが、自社のサイト上には

新卒募集は掲載していない。この企業以外にも数社そういった企業があったが、学生がそもそも企業を知らず、サイトにアクセスしないため作成をしていないという。

「社ではホームページや就活マッチングイベントにも投資しているが、勤務地が地方になるため大手や都市部企業に学生をとられ、芳しくない状況が続いているという。少子高齢化が進む中、地方中小企業は新卒獲得に関してもかなり厳しい戦いを強いられている。

このイベントに参加し、中小企業の生の声を聞くことができた。全ての企業が必ずしも新卒を希望しているわけではないが、新卒を希望する中小企業の多くが、学生とのマッチングに課題を抱えていることが分かった。

### (3) 学生について

#### 学生アンケートの実施

学生の就職に関する情報収集には、メンバーの所属している6大学の学生に対し、紙媒体でアンケート調査を実施した。このアンケートは、学生が「働くこと」「住むこと」についてどのように感じているのかを調査するために実施したもので、学生686名からの回答を得た。このアンケート結果から以下のようなことが分かった。

#### 【アンケート結果】

##### ① 学生の就職の意識について

アンケート回答者のおよそ7割が1, 2年生であったにも関わらず63%もの学生が「将来にやりたいことを決めている」と回答している。しかし、就職活動を始めているかという項目では半数以上の学生が「行っていない」と回答している。また1, 2年生から就職活動を始めることに関する項目では、およそ7割の学生が「早い」と感じると回答した。

1, 2年生の多くはやりたいことは考えているが、就職活動には結びついていないことがわかった。企業説明会やインターンといった就職活動は3, 4年生になってから行うものと考えている学生が多いと思われる。

##### ② 働くということについて

学生が働くうえで重視する条件についてのアンケートでは、「給料がいい」「福利厚生が整っている」「仕事にやりがいがある」などの回答が多く目立った。また、回答が最も少なかった項目は「出世がしやすい」というものであった。この結果からは多くの学生が仕事には「安定性」や「充実感」を求めているものだと考えられる。

##### ③ 中小企業のイメージについて

まず、企業のマイナスイメージに関するアンケートでは、「経営が不安定」「給与や休日が少ない」という質問にはおよそ半数の学生がそう思うと回答した。「閉鎖的で古い体質」という質問にはおよそ3割がそう思うと回答し、「就職を反対される」という質問にはそう思うと回答した学生は1割ほどにとどまった。次に、企業のプラスイメージに関するアンケートでは「出世が早い」

「高い技術力」があるという質問には3割ほどの学生がそう思うと回答し、「自分の裁量が大きい」という質問には4割の学生がそう思うと回答した。また、「アットホームだと思う」という質問にそう思うと答えた学生は半数を超える結果となった。

この結果からは、経営や閉鎖的で古いということに関してはマイナスなイメージを持っている学生が多いものの、自分の裁量が大きい、アットホームな雰囲気であることに関してはプラスのイメージを持っている学生が多いということがうかがえる。しかしすべての質問でよくわからないとの回答も少なくはなかった。こういったことから、学生はあまり中小企業のことを知らないのだと考えられる。

#### ④ 社会人になったら、どのような地域に住みたいか

意外にも「自然が豊かである」ことを望む学生が半数を超え、「職場が近い」ことを望む学生はおよそ9割にのぼった。この2つのアンケートから自然が多くある多摩地域で暮らすこと、そこに立地する企業で働くということに潜在的な需要があることが窺える。(図4,5)

実家の近所で働きたい



図4

自然が豊かなところで働きたいか

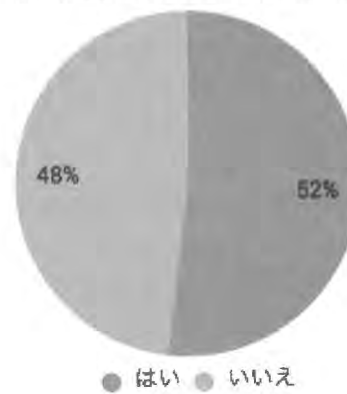


図5

#### (4) 過去の企業・産業チームの取り組みについて

私たちは、上記調査に加え、更に多摩未来奨学生2期生、3期生の取り組みについて振り返った。同様の課題設定をしてきた過去のチームの取り組みに関し、それぞれの成果と問題点を挙げ、問題意識の確認と、4期生である私たちが今後取り組む方向性について検討した。

2期生の取り組みは、「就職活動において中小企業の隠れた魅力を学生に伝える」をテーマとした活動であった。「たまかつ」という就職合同説明会イベントを開催し、参加者の多摩地域の中小企業に対するイメージが変わったという固定観念を打破したことが大きな成果となった。しかし、一方で課題もあり、説明会形式だと、1ブースあたりの説明時間が決められているため、うわべの情報で終わってしまったことや、参加いただいた企業は優良企業ではあったが多くの企業で若

手社員が説明を行っていたため魅力を伝えきれなかったという課題があった。

3期生の取り組みは、テーマを「中小企業の人材確保」に設定し、人工知能を活用したスマートフォンアプリ「グロッシブ」の作成であった。多摩地域の中小企業に絞って企業情報を掲載し、学生が登録した情報に基づき、AIで学生にお勧め企業を提示することでミスマッチを防ぐというものである。本格的なアプリであり、成功や失敗を人工知能が学習し、データを蓄積していくため、成長可能性が高かった。また、大手ナビアプリでは紹介することの出来ない優良企業を学生に紹介する事が出来る強みもあった。しかし、このシステムを実際に活用するまでには至らなかった点や、アプリ使用の前提条件として学生が多摩地域の中小企業に就職することを選択肢に入れていなければならないという点が課題として残った。

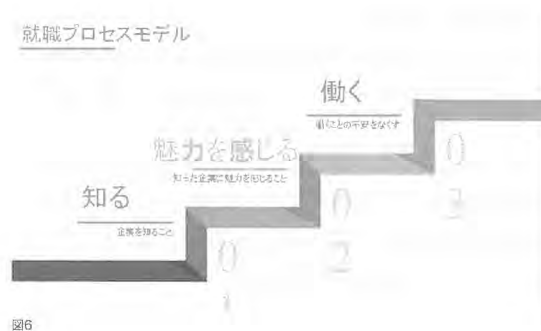
これらの成果や反省を踏まえて、どのような企業であれば就職したいか、どのような就職イベントなら参加してみたいかと考えるか、私たちならではの学生目線でブレインストーミングを行った。

### 3. 仮説

以上の現状把握を基に、多摩地域の中小企業と学生を繋げるに際して、どのような政策が必要なのか、その政策を立案していく上で必要な要素とは何かを検討することとした。特に、八王子市の方々のお話にもあったように、“企業視点”ではなく“学生目線”での要素を盛り込むことで、既存の取り組みをより良くする工夫が見つかるのではないかと考え、学生が企業に就職先を決まるまでにはどのような心理的プロセスが存在しているのかについて議論した。

#### (1) 3つのプロセス

そこで浮かび上がってきたのが、学生と多摩地域の中小企業が結びつくにあたって、学生が就職するまでの道のりに存在する「3つのプロセス」をクリアすることが必要であるという仮説である。以下の図のように、私たちは自身の経験やデータを基にチームでブレインストーミングをした結果、就職に至るまでには①知る②魅力を感じる③働くという「3つのプロセス」があるという流れを導き出した。(図6)



#### ① 知る

1つ目は、「知る」というプロセスである。3期生がグロッシブを作成する際にも意識した点であるが、どんなに優良企業であっても、そもそも学生に認知されていなければエントリーに至らない。実際に、8割もの学生が大学3年生の3月までに知っている企業にエントリーをしているという調査結果<sup>7</sup>が出ており、まず学生に知られていなければスタートラインにさえ立てないことが分かっている。このことから学生が「知る」ためのプロセス、そして早期に学生と中小企業が出会う必要性があると考えた。

#### ② 魅力を感じる

2つ目は、「魅力を感じる」というプロセスである。企業の名前を知ってはいるが、当然その企業に魅力を感じていなければエントリーには結びつかない。今年度の多摩未来奨学生プロジェクトでは、4期生のワークショップで京西テクノス株式会社の臼井社長や、株式会社キャリア・マムの堤社長をお迎えし、講演していただいた。その際、経営者の多摩地域や自社に対する熱い想いを自らの言葉で直接伝えていただくことで心が動かされ、その企業の魅力を体感することができたということが、当チームのメンバーの共通意見として挙げた。

また、コーディネーターの先生との出会いを通して、企業人としてではない個人のつながりから、コーディネーターの所属する企業にエントリーするに至ったチームメンバーもいた。こうした事実から、会社の魅力を体感するプロセスの必要性を導き出した。

#### ③ 働く

3つ目は、「働く」というプロセスである。2つのプロセスを経て企業を選択する時、その企業を実際を選ぶかどうか最終的な判断である。「良い企業で、さらに魅力も感じてはいるが実際に働くまでには至らなかった」という2つ目のプロセスで止まってしまっただけでは、最終的な多摩地域における就職人口の増加は見込めない。したがって、働くことを決意できるまでに至るよう、自分が実際にその会社で働く姿にリアリティを持たせるために、インターンなどの機会を創出するプロセスが必要であると考えた。

実際の調査でも就職決定企業で働きたいと思ったタイミングについて「インターンに参加したとき」が、前年度より3.5%増加していることが分かった<sup>8</sup>。また、第一希望の企業に決定した学生が、この企業で働きたいと思ったタイミングも「インターンに参加したとき」が最多の28.2%を記録している<sup>9</sup>。現在では1DAYインターンなど、短期間のインターンも多くの企業で導入されている。実際、インターンの実施に投資を行う企業と行わない企業とでは充足率に大きな開きがあり、投資を行わなかった企業の充足率が34%なのに対し、投資を行っている企業の充足率は54%となっており、インターンへの投資が実に20%もの充足率を高める結果となっている<sup>10</sup>。

しかし、インターンの実施率は大手企業が55.2%であるのに対し、中小企業では27.4%と低い<sup>11</sup>。

7 株式会社ディスコ「キャリアタス就活2018学生モニター調査」,2017年5月版,p2

8 同資料,2017年7月版,p8

9 同資料,2017年8月版,p6

10 多摩大学地域活性化マネジメントセンター,多摩信用金庫,「2015年度多摩地域の採用実態調査」

11 経済産業省「新卒採用等への取り組み状況」に関するデータ

特に、多摩地域の中小企業においては実施率が低く、多摩ブルー・グリーン賞の受賞企業を対象とした約80社へのアンケート調査では、現在インターンを行なっている企業は15%にも満たないという調査結果が出た。

## (2) 「生業」コンセプト

では、以上のプロセスをどのようにして政策提言に繋げていくのか。今回の課題は、「多摩地域における中小企業の就職学生をいかに増加させるか」であった。すなわち、多摩地域で働くこと、中小企業で働くことの、双方に対して就職学生の増加に向けたアプローチを行っていく必要がある。したがって、いかに双方に3つの上記プロセスを活かすことができるのかについて、政策提言をする上でベースとなるコンセプトを議論する中でひとつのキーワードが浮かんできた。それが「生業」である。

近年、「働き方改革」について政府でも活発的に議論されているが、働くことについて考えてみると、自らの環境の変化や、今後の自分の人生の選択そのものであるように感じる。そこで「働くことは、生きること」という捉え方が、自らの就業選択における選択肢を広げることに役立つのではないかと私たちは考えた。いかに収入が多いか、安定しているかといった要素や、景気の良し悪しなどの時代に左右されない、「自分の選択肢」として就職を捉えるようになれば、多摩地域や中小企業で働くという選択肢が、学生にとってより身近になるのではないかと考えたのだ。

本来の生業の意味とは、「①生計を立てていくための作業。すぎわい」②農耕に従事すること」<sup>12</sup>であるが、私たちはそこから「地域に根ざした形で日々の糧を生み出し、働くことと生きることの醍醐味が交差するような働き方」であると解釈した。この解釈を持つことで、上記で仮定した3つのプロセスをひとつの流れとして満たし、それぞれの「わたしの働き方」を描けるようなプロジェクトにしようという思いで、コンセプト化した。(図7) このコンセプトを、3つのプロセスをそれぞれクリアする上での指標として掲げることで、多摩地域、そして中小企業それぞれの魅力を学生に伝えることが可能になるのではないかと考えた。



Nariwai Marche

図7

12 三省堂『大辞林』

## (3) イベントとインターン、セットによるアプローチ

前述の生業コンセプトをベースに、仮説である3つのプロセスを満たすにはどう行動したら良いのか、具体的な行動についてチームで議論した。その結果、学生が企業と出会う場面から、インターンなどの直接的にその企業で働くことを体感する場へつなぐことを、全て一貫したパッケージとして、プロジェクトを企画するというアイデアが生まれた。3つのプロセスがどれか単体で満たせる企画というものは、民間や行政、大学などでそれぞれ企画がなされているものの、3つのプロセスを一度に満たせる企画というものは多摩地域において見つかつていなかったからである。今回は、3つのプロセスの中の「知る」と「魅力を感じる」を満たすイベントと、「働く」を体感してもらいインターンをセットで参加してもらい一連のプロジェクトを企画することにした。

## 4. 実証

### (1) 「生業マルシェ〜わたしの働き方、検索」の実施

3(3)を踏まえ、「生業マルシェ〜わたしの働き方、検索」というイベントを開催した。このイベントは、3つのプロセスのうち、「知る」から「魅力を感じる」までを満たすとともに、「働く」を体感して就職の足がかりとなるインターンまでをパッケージ化した。3(2)で述べた生業コンセプトのもと、学生が「働く」ことと自らの「生き方」とをリンクさせられるような体感型の就職マッチングイベントである。(図8)



図8

【開催概要】

日 時：2017年11月19日（日） 13：00 ～ 16：00

場 所：日野市多摩平の森産業連携センター PlanT

参加企業：多摩ブルー・グリーン賞の受賞企業をはじめとする、多摩地域所在の中小企業 6 社

- ・株式会社エマリコくにたち（国立市）
- ・株式会社キャリア・맘（多摩市）
- ・京西テクノス株式会社（多摩市）
- ・株式会社グリーンワイズ（多摩市）
- ・株式会社 TRUST（多摩市）
- ・株式会社メルヘン（八王子市） ※敬称略

【イベント内容】

第 1 部 <種> パネルトーク ～生きる・働くについて社長からお話をきこう～

株式会社エマリコくにたち代表取締役社長の菱沼勇介氏、株式会社キャリア・맘代表取締役社長の堤香苗氏に、それぞれ20分ずつ基調講演をしていただいた。菱沼社長からは、「多摩地域で生業を起こす」というテーマ、堤社長からは「自分らしく働く」というテーマでお話いただいた。

第 2 部 <稲> ワールドカフェ ～企業と学生、本音の交差点 働くを考えよう～

参加企業の提供による軽食を食べながら、企業の説明ではなく、働くこと、多摩で暮らすことなどについて双方向の意見交換を実施した。企業側2～3名と、学生5～6名を1グループとし、各グループに奨学生1名がファシリテーターとして参加、最後に各グループの代表学生に感想を発表してもらった。2つの企業に社内製品であるサンドイッチやベーグルを提供していただき、企業の方と学生で飲食をしながらフランクに話せる雰囲気づくり、また企業製品に直接触れることで、その企業を体感するきっかけづくりができた。

< 話題例 >

- ・やりたい仕事と食べていける仕事
- ・奨学金の返済
- ・残業のリアル 等

第 3 部 <穂> ブース展示 ～6社オリジナルブースを巡ろう～

各企業のブースを設置し、15分間隔で全員が6社を回る機会を設けた。学生が質問をする時間もつくりながら、企業ごとにパンフレットの配布や野菜の提供、プロジェクターによる会社説明などを行っていただいた。(図9)

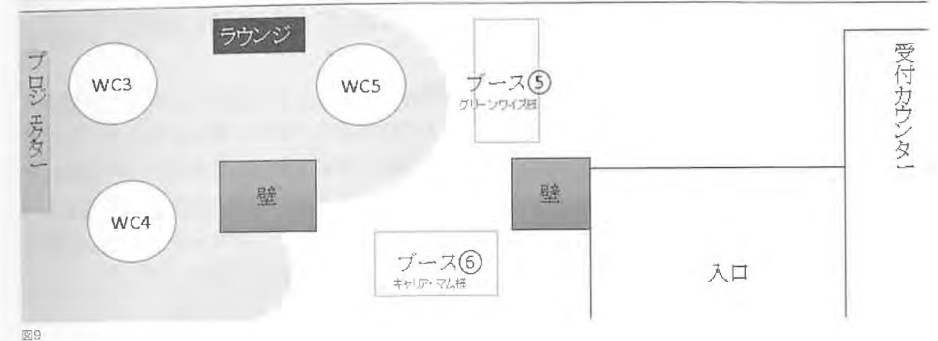
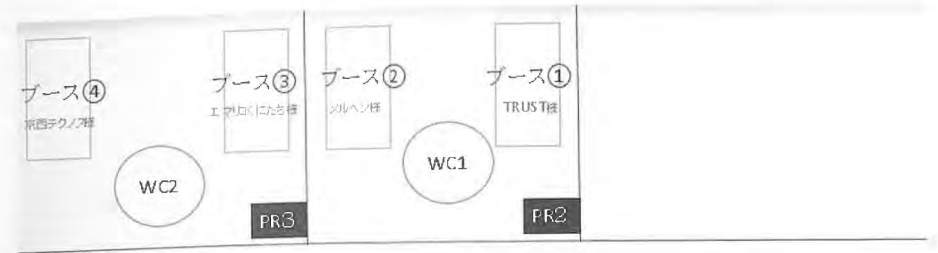


図9



<第 1 部> パネルトークの様子



<第2部> ワールドカフェの様子



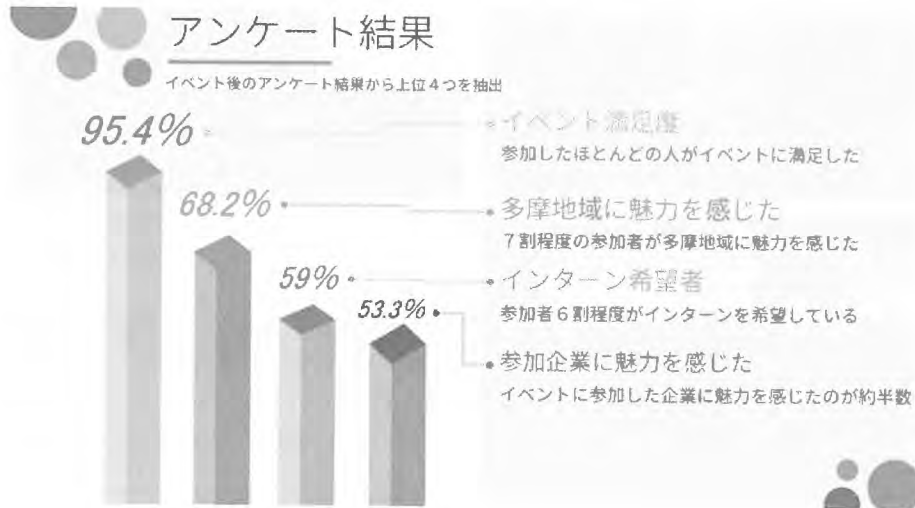
<第3部> ブース展示の様子

私たちは、前述した早期に学生と出会うことが重要になるというデータから、大学1・2年生を中心に集客活動を行った。また、従来の就活イベントでは事業そのものに魅力を感じなければそれ以上に魅力を感じる機会がないことから、本音で双方向に意見交換ができるワールドカフェを実施した。また、参加者が本音で話せるように、就活を感じさせない環境、リラックスできる環境で行った。具体的には、企業も含め全員が私服での参加をしたこと、オフィス感のない空間で行ったことである。

## (2) 結果と分析

今回のイベントの学生参加数は22名で、そのうちの7割が1・2年生という結果になった。さらに私たちはイベントについてのアンケートも実施した。以下の図はそのアンケート結果である。

(図10)



この結果は、多くの学生が企業を知り、魅力を感じ、インターンを希望したことが窺えるものであり、イベントは成功だったと言える。また、インターンを希望した59%の学生のうち、7割が2年生であったこともあり、この時期からでも就職活動に関心を持っている学生がいることが分かった。本格的に就職活動に取り組む前であることもその要因ではないかと考えられる。

また、学生の満足度が高かった要因としてリラックスできるように企業側も参加者側も私服での参加にしたことが挙げられる。イベント会場も講義室や会議室ではなく、緑を基調とした開放的な空間にしたことで、よりお互いが接触できる時間が増え、深い話ができたというのも満足度を上げた要因であったと考えられる。ワールドカフェでは、企業からは新卒の方など、比較的大学生世代に近い社員の方に参加してもらったことで、働く前と後のイメージの変化や不安の共有などもお互いに話しやすかったとの声が挙った。

詳細なアンケートの結果は、以下のとおりである。

① 所属大学について (表3)

あなたの大学名を教えてください



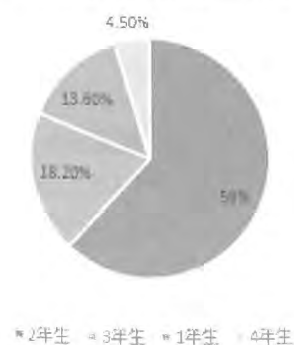
② 所属学部について (表4)

あなたの学部を教えてください



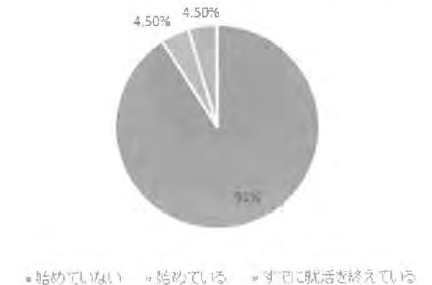
③ 学年について (表5)

あなたの学年を教えてください



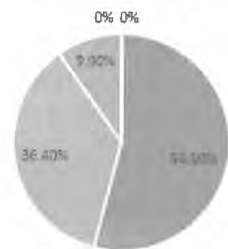
④ 就職活動を始めているか (表6)

あなたは就職活動始めていますか。



⑤ テーマ（生業コンセプト）の満足度（表7） ⑥ イベントのコンテンツで特に良かったもの（表8）

テーマの満足度



■満足 ■やや満足 ■普通 ■やや不満 ■不満

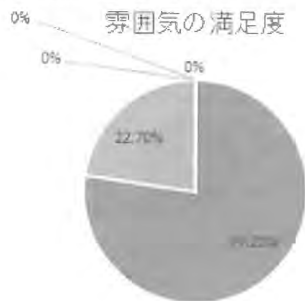
⑥ イベントのコンテンツで特に良かったもの（表8）  
イベントのコンテンツで良かったものがございましたらお知らせください



■ワールドカフェ ■ブース展示 ■ゲーミング ■パネルトーク

⑦ 雰囲気（表9）

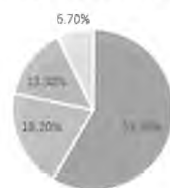
雰囲気の満足度



■満足 ■やや満足 ■普通 ■やや不満 ■不満

⑧ 多摩地域のどのような点に魅力を感じたか（表10）

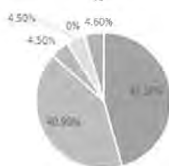
「感じた」とお答えした方にお聞きします。どのような点に魅力を感じましたか



■参加企業 ■人 ■多摩地域で働くこと ■その他

⑨ また参加したいと思うか（表11）

またこのようなイベントに参加したいと思いますか



■そう思う ■やや思う ■普通 ■やや思わない ■そう思わない ■非該当

(3) 仮説の検証

上記イベントのアンケート結果と当初の仮説を照らし合わせることで、実際に私たちの立てた仮説が正しかったのかどうかについて以下のとおり検証した。

① 知る

大学3年時までには知っている企業でないと興味を持たずエントリーに至らないという状況を踏まえ、1・2年生を中心に学生を集めた。結果として、3年生よりも1・2年生の方がインターンへの参加希望割合（n年生のインターン参加希望数/n年生の参加数）が多かったことから、やはり早期に学生と出会うことが重要であることが実証された。

② 魅力を感じる

仮説段階で、私たちの経験から経営者に直接話をさせていただくことや、社員の方との企業説明ではない関わりから魅力を感じるのではないかと考えていた。経営者に参加いただいた企業へのインターン志望数が多かったこと、活発に双方向の意見交換が行われていたワールドカフェが最も満足度が高かったことなどから仮説は正しかったと考える。実際、参加企業に魅力を感じた人は7割近く存在した。また、就職活動やオフィスを感じさせない環境をセッティングしたこともコミュニケーションを円滑にすることに一役買ったため、魅力を感じさせるための要素として重要である。

③ 働く

今回のイベントではインターンに繋ぐために参加希望を募ったが、実施までには至っていないため就職に結びつくのかは検証できていない。だが、図9によるとおり、企業に魅力を感じた学生の6割がインターンに興味を示している。前述したインターンの効果も考えると、魅力を感じてもらうことができた場合、インターンを用意していることで採用の可能性がさらに高まる。逆を言えば、インターンなどの「先」を用意できているかいないかで、学生を採用するチャンスが大きく変わってくるということである。

このことから、魅力を感じてもらい接し方までが出来ていればインターンを行うことは有効であるとわかった。実際に、今回の参加企業はインターン希望を出した参加学生の名簿を控えており、今後インターンを受け入れる体制を整える方針が決定している。

(4) まとめと課題

以上の検証を踏まえて、中小企業が3つのプロセスを満たし、採用に繋げていくためには以下4点が必要だと言えるだろう。

- 学生が1・2年生である早い段階から出会う
- リラックスできる環境の整備
- 双方向の意見交換（学生がそれを実感できる）

インターンなどの現場を体験・見る機会がある

但し、生業マルシェでは比較的時間に余裕のある私たち学生が、イベントの企画、運営、集客までを行ったことや、参加企業にご協力いただいてインターン実施を検討していただいたことが背景にある。実際に採用を経営課題としている多摩地域の中小企業の全てがこの条件を満たすことは容易ではない。そこで、次節ではこれを満たすための仕組みについて提案を行っていく。

## 5. 政策提言

生業マルシェにより、3つのプロセスを分割させることなく一体で満たすことで「働いてみたい」と学生に感じてもらえることが実証され、プロセスを満たすために必要となる条件も見えてきた。インターンの実施と検証までが出来ていないため、魅力を感じた企業で働くという選択に進むかどうかは定かではないが、同じように学生にアプローチをすることによって、学生に地域の中小企業に関心を持たせ、働いてみたいと思ってもらうことは可能であると考えられる。具体的なアプローチ方法としては、各企業の説明会や合同説明会の内容を3つのプロセスを満たすものに代えていくことや、今回私たちが参加した新技術創出交流会などのような、もともと学生向けに企画されていないイベントであっても学生が参加できるようにすることでプロセスを満たすということも考えられる。

だが、前節で述べたように3つのプロセスを満たす条件、それ自体が課題でもある。改めてプロセスを満たす条件を確認すると、

- ・学生が1・2年生である早い段階から出会う
- ・リラックスできる環境の準備
- ・双方向の意見交換（学生がそれを実感できる）
- ・インターンなどの現場を体験・見る機会がある

の4つがある。また、それぞれが単体ではなく一体でこの条件を満たさなければならないということも課題となるだろう。これを中小企業が単独で取り組むのではなく、行政や大学と連携しながら、それぞれの立場を生かした取り組みを行うことで克服することを提案したい。なぜなら、中小企業は大手企業とは異なり、採用の専任者を社内に配置することは現実的に困難であり、知名度や資金等の面からも上記の4つを満たす活動を地域の企業が自社で行うことは困難であるからだ。

以下で各主体の役割・取り組みを、現状を確認しながら提案していく。また、プロセスや条件を満たすためだけのものではなく、参加者を集めることや、インターンを実施するなどの仕組みとして機能させていくための提案も行っていく。

### ①「行政」への提言

合同説明会の主催、大学と企業が出会う場の提供、就活セミナーの主催、2章で取り上げた若

者奨励金のように、行政は、地元企業へ就職した学生への支援金交付などを行っている。これらの取り組みから、行政の立場から行われていることは企業と学生を結ぶ裏方からの援助であることが分かる。そして、援助は金銭的なものや空間の提供という形で行われており、企業の採用活動及び学生の就職活動に対して直接的にアクションするものではないが、中小企業が自社で解決できない課題を解決する支援を行っている。だが、プロセスを満たすような支援になっているとは言いがたい。それでは、どのような支援を行っていくとべきであろうか。

場の提供に関しては、説明会などで会場用意を主催者や参加企業だけに任せるのではなく、今回生業マルシェで利用した日野市の公共施設「PlanT」<sup>13</sup>のような、堅苦しさを感じさせない環境の提供を検討してはどうだろうか。また、説明会だけではなく、普段から予約制で使えるスペースとしてこのような場所を用意し、一企業の説明会・懇談会やイベントなどで活用してもらおうということもできるのではないか。近年、ビル内にキャンプ場などの非日常的空間をつくり、企業の打ち合わせなどの場所として提供するサービスなども行われているが、リラックスして打ち合わせすることで生産性が上がるという効果も期待されている。これについても、同じような効果が見込めると考えられる。生業マルシェにおいても、データは取っていないが、企業と学生の両者が通常の説明会と比べてリラックスして参加できているように見受けられた。このような環境を、常時であれ、臨時であれ用意することが重要となる。

また、金銭的支援についても、学生に対してではなく、インターンを実施した企業、採用専任者を置いた企業に支援を行ってはどうだろうか。直接的な支援ではないが、インターンのノウハウを教えるセミナーやホームページ作成のためのセミナーを行政が主催する、もしくはアドバイザーを派遣するということも考えられるかもしれない。現状でも、2章であげた販売開拓支援のように、行政がアドバイザーを派遣して企業をサポートしている。これと同じような支援の形で行うことが出来るのではないだろうか。

取り組みを行うに際しての行政のメリットとしては、若い住民が増え、結果として税収の増加に繋がることが見込めるといえることである。地元企業に就職したからと言ってそこに住むとは限らないが、アンケート結果からも9割の学生が職住近接を望んでいると回答しているため、地元企業に就職すればその近隣に住む可能性は高い。

### ②「大学」への提言

学生を動かすという点で大きな役割を担えるのが大学である。プロセスを満たすためには1・2年生を中心にアプローチをしていくこと求められるが、現状把握でも取り上げたように、アンケート結果からも分かるように1・2年生は就職活動を始めるのはまだ早いと考えており、企業が表立って学生を集めるのは困難であると想定できる。そのため1・2年生と企業の接点をつくるためには大学が果たす役割が不可欠となってくる。

現状、学内説明会の開催、ポータルサイトなどによるイベント等の告知、提携企業へのインターン紹介などが行われている。ただ、これらも企業の現状から考えて不十分であると言わざるを得ない。インターンへの誘引があるため効果はありそうだが、企業への電話アンケートで「採用に繋がらない」という声が集まるなど、大学経由のインターンの効果は薄いようだ。そのためにイ

<sup>13</sup> 「日野市多摩平の森産業連携センター PlanT」

インターンを止めたという企業もいくつか見られた。その原因として、プロセスを飛ばしてのインターンであることが考えられる。インターン募集の企業情報を資料に載せ、学生が選択するやり方では、私たち学生の立場からすると、企業に魅力を感じて参加することにはなりにくい。そこで、説明会や懇談会への参加を1・2年生のキャリア授業の一貫として行うことを提案する。また、年間を通して、規定数参加すれば単位や実際の就職活動時に特別講習を受けられるといった形式にし、誰でも参加可能にするというやり方も考えられる。いずれにせよ早い段階で企業と出会い、魅力を感じる機会を学生に対して提供していくことが大学には求められる。

また、学生が企業について何を知りたいのかを整理し、その内容を企業側に公開していくということも提案したい。生業マルシェの際、学生の質問の意図と、回答が噛み合っていない場面が一部見受けられ、企業側の考えることと、学生の考えることに違いがあることを認識させられる場面があった。学生目線になって答えるという点で、若手の参加を企業側にお願いすることはもちろんだが、大学側からもそのような情報提供があると、コミュニケーションが円滑になり、より魅力的に感じてもらえる可能性が高まると考えられる。

さらに、説明会や懇談会の場に、中小企業に就職を決めた4年生にティーチングアシスタントやスチューデントアシスタントという立場で参加してもらえるよう参加者を募ることも提案したい。キャリア授業ですでにその立場にいる人や4年生用のキャリア授業の受講者に参加してもらう方法も考えられる。これは、リラックスできる環境を整えるという点と、学生の聞きたいことや学生が魅力を感じることを企業から聞き出すという点で効果が期待できる。

大学にとってもキャリア授業が充実するという点でメリットがあると考えられる。1・2年生のキャリア授業だけでなく、4年生用のキャリア授業においても、働くということを様々な企業から聞く機会ができるという点などで充実させられるのではないかな。また、学生の就職先の選択肢を広げることができることもメリットであろう。地元の中小企業とあまり繋がっていないという大学であれば、この取り組みによって繋がりを創ることもできる。

### ③「企業」への提言

企業もさらに工夫を重ねていくことが求められる。最終的に学生が就職するかどうかは企業の対応が重要になるからだ。例えば、インターンの実施が厳しいのであれば、会社見学や各社員への面談予約ができるようにするなど検討していく必要がある。実際に働いている現場を見ることが、学生側から話したい人を指名できるようにすることで、学生が知りたい情報を得られる可能性が高まり、それにより魅力を感じる学生も出てくるのではないかな。但し、そのためにはホームページなどのインターネットを活用した工夫をしていく必要があるだろう。事前に志望度が高くなければ電話での問い合わせ等は来ないと考えられるからだ。ホームページが難しければ、無料で比較的簡単に作れるオンラインでのアンケートを利用して、説明会や懇談会の場で希望日程をその場で入力してもらうことも可能だろう。

また、学内説明会、合同説明会などに参加しに来た学生に対し、選考に進むかどうかという選択肢だけでなく、自社だけの懇談会に参加するという選択肢を与えるということも企業の魅力を感じてもらうために有効になってくるのが生業マルシェの結果からも考えられる。そして、説明会などには、学生と目線の近い若手と、会社の歴史や理念、将来を語れるという意味で経営者

の参加が魅力を感じてもらうために重要となる。生業マルシェの結果としても、若手や経営者に参加いただいた企業に魅力を感じた学生が多かった。(説明会では、これまで通りの3・4年生に向けた内容ではなく、1・2年生に向けた内容にすることも必要だ。3・4年生は本格的に就活をして来ており、会社のことを多く知りたがるであろうが、1・2年生は就活をまだ早いと考えており、企業そのものに対する関心度は3・4年生よりも低いからだ。)

そして、大学がキャリア授業の一環として1・2年生を赴かせるという前提ありきではあるが、大学と提携して行うインターンに積極的に取り組むことと、そのインターンを3つのプロセスを満たせるものにするということを提案したい。これによって定期的に学生と早期に出会い、プロセスを満たすことができれば採用につながる可能性も高まるからだ。懸念点としては早期に出会うが故に、就職までにはタイムラグが存在し、就職者がすぐに来ない点や、実際に効果があるかどうかの検証が2~3年後になるという点だ。これについてはこれまでの3・4年生を対象にした採用活動と並行して行うことや、長期的視点をもって取り組むしかない。しかし、学生の判断を本格的な就活が始まるまで待つ必要もない。メールやSNSを使ったコミュニケーションを取り続けることで、学生の志望度や自社への興味を判断する事は可能であると考え。連絡を取るという意味で、各社員が学生との連絡役を担うということが必要になってくることもあるだろう。

### ④ まとめ

上記の三者の取り組みを複合させることで、「知る」「魅力を感じる」「働く」というプロセスを満たせると考える。プロセスに直接関係のある取り組みをまとめると以下ようになる。

#### 【知る】

<行 政>

- ・説明会の主催や企業と学生をつなぐイベントを開催する  
(但し、対象に大学1, 2年生を加える)

<大 学>

- ・キャリア授業を受講する1, 2年生を中心に、行政が主催する説明会や企業の開催する説明会・懇談会に参加するカリキュラムを導入し、参加者を増やす

<企 業>

- ・説明会への参加、懇談会の開催をし、学生との接点を増やす

#### 【魅力を感じる】

<行 政>

- リラックスできる環境を整える  
(備品の取り揃えなど)

<大 学>

- ・学生の就職に関して興味のあることをまとめる  
(各大学から集まったものをまとめて企業に共有する)
- ・学生を説明会や懇談会にファシリテーターとして派遣する

(キャリア授業のチュードントアシスタントやティーチングアシスタントを対象にするなど)  
 <企業>

- ・若手と社長が説明会、懇談会に参加する。

## 【働く】

<行政>

- ・インターン実施企業に対して補助金交付、インターン実施のノウハウ教えるセミナーの開催やアドバイザーの派遣を行う

<企業>

- ・インターンや会社見学、面談予約システムなど、学生がそこで働くことをイメージできる仕組みの実施  
 (実施するだけでなく、学生と接するその場で参加予約ができるようにする)

<大学>

- ・大学内で、企業の方を呼んだ出張インターンや特別講座を実施する

前述したように、すでに行われている合同説明会に対して、この取り組みを行い、3つのプロセスを満たすイベントに代えていくことが最も実践しやすいと思われる。だがそれだけでなく、学生と企業が接する際に常にプロセスを満たせる仕組みを整えることが最も重要である。

いずれにしても、上記の取り組みを通して、学生が企業を知る機会の増加(参加者を増加させる施策の実施)、魅力を感じるコンテンツと環境の整備、働くことがイメージできる仕組みや制度の準備の3つ同時に行っていくことで、学生に「働いてみたい」と感じてもらえる可能性が高まり、課題の解決を促進させることができると考えられる。

## 研究プロジェクトを終えて

市川 紗雪(法政大学 社会学部 1年)

多摩未来奨学生として1年間活動をして多くのことを学びました。初めて顔合わせをした時はあまり多摩地域に関する知識がなく正直不安なところもありました。しかし、活動していくうちに多摩地域に惹かれていき、気づいた時には多摩地域の魅力を1人でも多くの人に伝えていきたいという気持ちが芽生えました。また、生業マルシェというイベントを開催するにあたり、何かを催す事の難しさや参加企業にアポを取りいく等、社会人になる上で大切な事も学ぶことができました。

活動をする場所が自宅から遠く辛い時期もありましたが最後まで活動をやり通せたことはコーディネーターの方と仲間の存在が大きかったと思います。普段関わるのが少ない他大学の方と意見を交わすことはとてもいい経験になりました。この活動に関わっていただいた全ての方に感謝をしています。これからも多摩地域の良さを発見し、伝えていければいいなと思います。

大橋 奈紗(多摩大学 経営情報学部 2年)

私は多摩未来奨学生の4期生として1年間活動し、様々なことを学ぶことができました。このプロジェクトに参加することを決めたときは本当に自分に1年間の活動ができるものだろうかと不安に思うこともありました。しかしともに活動する仲間やコーディネーターの方々とはとても丁寧に指導していただき、自分にやれることをやってみようと思えるようになりました。はじめのうちはあまり馴染みのなかった多摩地域のことについても段々と魅力ある地域なのだと気づき、この魅力を知ってもらいたいと活動するようになりました。今まで何か大きな活動に参加したことなかった私にはこの多摩未来奨学金プロジェクトは貴重な経験になりました。今後の活動にも今回得た経験を活かしていきたいと思います。

木下 萌(法政大学 社会学部 1年)

この一年、大変勉強になりました。何気なく生活しているだけでは見過ごしてしまう地域の魅力。人のあたたかさや力強さ。様々なことに気が付けたのはこの多摩未来奨学金の活動があったからこそだと思います。また、学年も専門も違う仲間たちと一緒に活動する難しさと、その苦勞を上回るほどの大きな喜びと学びを得られたのは私の大きな財産となりました。足りないところばかりの私を支えてくれた仲間と最後まで活動を見守ってくれたコーディネーターのお二方には感謝しかありません。

今後も今回の活動で得られたことを生かして、もっと多摩地域について知り、その魅力を発信していきたいと思っています。

熊谷 健太郎(亜細亜大学 法学部 3年)

多摩未来奨学生として1年間活動をして多くのことを学びました。初めて顔合わせをした時はあまり多摩地域に関する知識がなく正直不安なところもありました。しかし、活動していくうちに多摩地域に惹かれていき、気づいた時には多摩地域の魅力を1人でも多くの人に伝えていきたいという気持ちが芽生えました。また、生業マルシェというイベントを開催するにあたり、何かを催す事の難しさや参加企業にアポを取りいく等、社会人になる上で大切な事も学ぶことができました。

活動をする場所が自宅から遠く辛い時期もありましたが最後まで活動をやり通せたことはコーディネーターの方と仲間の存在が大きかったと思います。普段関わるのが少ない他大学の方と意見を交わすことはとてもいい経験になりました。この活動に関わっていただいた全ての方に感謝をしています。これからも多摩地域の良さを発見し、伝えていければいいなと思います。

富永 茉衣(拓殖大学 工学部 3年)

学校も学年も違う、学んでいる分野も違う、最初は上手くいか不安でした。会えるのは月に

一度、思うように進まずチームの雰囲気が悪くなったこともあります。ですが、そういう時にお互いを慮ることでフォローしあえたと思います。

このチームは私も含め4年生が3人もいるため、就職活動や卒業論文等で中々スケジュールが合わないことがありました。そんなとき2年生や3年生が進んで仕事をこなしてくれたり、逆に4年生だからこそアドバイスしたりとお互いを助け合いました。

他大学の学生同士が1つのプロジェクトを成し遂げることは簡単ではありません。人を慮る気持ちで円滑に物事を進めることを強く感じました。

長島 美月 (帝京大学 法学部 1年)

まず始めに、貴重な体験をさせていただきましたことを心より御礼申し上げます。この一年、苦しくも楽しく、非常に充実した時間を過ごすことができましたのも、ひとえにみなさまのおかげです。誠にありがとうございました。

「スポンジになる」、これは私がこの活動を始める前に決めた個人の目標です。様々な人と関わり、様々なことを体験していくのだからそれを学び、吸収しなければもったいない！そのような考えから立てた目標でありました。おかげさまで、かなり濡れたスポンジになることができたように思います。しかし、吸収で終わることがあってはいけません。吸収した学びを糧とし、そして誇りとし今後も精進して参りたいと思います。

中村 光弘 (創価大学 経営学部 3年)

この一年間の活動を通して感じたことは、属性を超えたネットワークを持つことの重要さです。地域規模の大きな課題を解決するには、それに関わるすべての主体が協力をしなければならぬと感じた為です。目的を異にする主体同士が同じ目標を掲げて協力関係を築くことはそれだけでも困難であると思いますが、今後の社会を考えたときにあらゆる場所や規模でこのことが必要になると思いました。今回の経験で、そのことを肌感覚として知れたことは今後の自分にとって大きな財産になると思います。目の前のことに終始するのではなく、全体にとって何が益になるのかを考えて行動できる自分に成長していきたいと思っています。ご支援いただいた皆様、ご協力していただいた皆様、誠に有難うございました。

企業・産業グループ チームリーダー

八村 美璃 (中央大学 法学部 2年)

約1年半、一人暮らしを経験させていただいた多摩地域を離れ、もうすぐ1ヶ月。ごみの出し方から走っている電車、生えている草花、関わる人々……身の周りを包み込む、全てのものが「まち」を形成しているということに、改めて気づかされた1年半でした。その中の1年間を、多摩未来奨学金4期生として、生活させていただきました。

アルバイト先の居酒屋が、実は奨学金寄附企業の社長にごひいきにいただいていると知っ

たこと、「生業マルシェ」の企画の説明があったからこそ、住んでいた場所の近くに、緑溢れるヨガスタジオやレストランがあると知ったこと、活動を応援して下さる企業の方や、いつもサポートしてくださった事務局の方々の存在、多摩未来創造フォーラムでの司会をきっかけに、八王子の学生政策コンペでも司会のお仕事を経験させていただいたこと、そして多摩未来プロジェクトで出会った仲間とコーディネーターの先生方…。挙げればきりが無いものの、その全てを数えたくならないほどの思い出や、これから先も、名前と顔が思い浮かぶ関係性を得られることができたことは、30万円以上の価値ある経験をさせていただいたということなのだ、深く感謝しております。

多くの支えによって、こうして今、プロジェクトのひと区切りを迎えることができました。しかしながらこの活動が、わたしたちにとってだけでなく、多摩地域にとって本当に価値あるものだったと言っていただけるようになるのは、きっと先の提言発表や、この拙い報告書によってだけではないと思います。これから先も、ここで生まれた出会いや、政策の要素を、また色々な「まち」にお世話になりながら自らの中でじっくり育て、いつかまた、この「まち」に違う形でお返しをしたいと思います。

実家から3時間を要する通学路が、今までよりぐっと近く感じるようになるほど、多摩地域が「大学のあるまち」ではなく、「わたしのまち」になりました。1年間、本当にありがとうございました。

また、「ただいま」を言い、帰ってきます。

## 担当コーディネーター講評

糸久 正人 (法政大学 社会学部 准教授)

今年度で4期目を迎える多摩未来奨学金プロジェクトですが、まずはご支援頂いている企業、地域、大学の皆様方にこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。

産業・企業グループは、主に多摩地域の中小企業が抱えている「企業と学生の就職マッチングがうまくいかない」という問題に着目し、具体的なアクションにまで結びつけた政策提案を行うべく、月に1-2回の会合を豊田市の「PlanT」で行って来ました。

今年度の奨学生は本プロジェクト以外の活動にも従事している学生が多く、地理的に分散した多摩地域の各大学から授業後ということで、全員の集まれる時間は毎回19時以降となってしまいました。それにもかかわらず、全員が最後まで一生懸命に議論を尽くした点は、よく頑張ったと思います。

しかし、今回に限ったことではないですが、プロジェクトの進捗管理が甘く、直前になって十分に詰めきれていないことが多々露呈したり、また、三歩進んでは二歩後退するような場面も見受けられたりしましたが、学生リーダーを中心に、チーム一丸となって乗り越えてきたことは、奨学生たちにとって、とても貴重な経験になったと思います。

肝心の政策提言の内容に関しては、上記のPlanTで「生業マルシェ」という学生主体の就活イベントを実施し、半数程度の参加学生が出展企業でのインターシップを希望したという意味では一

定の実証効果は得られたように思います。しかし、それをどのように仕組や制度として横展開していくのか、自分たちがいなくなった後にどのように継続していくのか、という点は十分に検討することができませんでした。したがって、やや尻切れトンボ的になってしまった点は残念ですが、イベントにご参加いただいた企業から、イベント内容に関してご好評頂いたことは、産業・企業グループの大きな成果であったと認識しています。

最後に、今回参加した奨学生たちは、チームで成果を目指すプロジェクト活動を通じて、ずいぶん成長したと感じています。今回の経験も活かして、奨学生の皆さんは日本社会のため、願わくは多摩地域のために大いに活躍してもらいたいと期待しています。あらためて、こうした貴重な人財育成の場を提供して下さった関係各位に、心より感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

本山 良樹（多摩信用金庫 価値創造事業本部 地域連携支援部 主任調査役）

奨学生にとって、このプロジェクトは普段学んでいる地域について多くの学びや気づきを与えてくれる貴重な機会になったのではないのでしょうか。私自身も今年度、初めてコーディネーターという立場で産業・企業グループに関わらせていただきましたが、奨学生同様にこのプロジェクトから多くことを学ばせていただきました。

「学ぶこと」と「働くこと」がつながっていないという、多摩地域の課題に対して奨学生は学生ならではの柔軟な発想と視点でアプローチしていき、それぞれのメンバーが壁にぶつかりながらもそれを乗り越えることで成長する姿を見せてくれました。これから社会に出る人、進学する人、引き続き多摩地域で学び続ける人、今後はそれぞれが違った道を歩んでいくこととなりますが、このプロジェクトを通じて得たものをメンバー全員がそれぞれの今後に活かしていただくことを願っています。

最後になりましたが、一緒にコーディネーターをさせていただいた糸久先生をはじめ、このプロジェクトにご協力いただいた多くの方々に感謝を申し上げ私からの講評とさせていただきます。ありがとうございました。

## 6. 参考文献

- [1] 株式会社ディスコ、「キャリアタス就活2018学生モニター調査」,〈<http://www.disc.co.jp/uploads/2017/05/18monitor201705.pdf>〉2017年5月版p2,2018年1月16日アクセス.
- [2] 株式会社ディスコ、「キャリアタス就活2018学生モニター調査」,〈<http://www.disc.co.jp/uploads/2017/07/kigyoreport201707.pdf>〉7月版p8,2018年1月16日アクセス.
- [3] 株式会社ディスコ、「キャリアタス就活2018学生モニター調査」,〈<http://www.disc.co.jp/uploads/2017/08/fs201708.pdf>〉8月版p6,2018年1月16日アクセス.
- [4] 経済産業省,「企業における「新卒採用等への取り組み状況」に関するデータ」,〈[http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/H26\\_Intern\\_reference.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/H26_Intern_reference.pdf)〉,2018年1月16日アクセス.
- [5] 公益財団法人東京市町村自治調査会,「多摩地域データブック～多摩地域主要統計表～2016(平成28年)版」,〈<https://www.tama-100.or.jp/cmsfiles/contents/0000000/675/6.pdf>〉, p65,2018年1月16日アクセス.

- [6] 三省堂 大辞林 〈<https://www.weblio.jp/cat/dictionary/ssdjj>〉,2018年1月16日アクセス.
- [7] 多摩大学地域活性化マネジメントセンター,多摩信用金庫,「2015年度多摩地域の採用実態調査」,〈[http://www.tamashin.jp/14\\_report/data/saiyo2015.pdf](http://www.tamashin.jp/14_report/data/saiyo2015.pdf)〉,2018年1月16日アクセス.
- [8] 「はちおうじ就職ナビ」,〈<https://www.kyujin.hachioji-tokyo.jp>〉,2018年1月16日アクセス.
- [9] 八王子市,「八王子市産業振興マスタープラン【第2期】」,〈[http://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/001/005/007/p006477\\_d/fil/sangyosinkoumasterplan2.pdf](http://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/001/005/007/p006477_d/fil/sangyosinkoumasterplan2.pdf)〉2018年1月16日アクセス.
- [10] 八王子市公式ホームページ,〈<https://www.kyujin.hachioji-tokyo.jp>〉,2018年1月16日アクセス.
- [11] 「日野市多摩平の森産業連携センター PlanT」,ホームページ 〈<http://www.city.hino.lg.jp/index.cfm/198,132957,322,2127,html>〉,2018年1月16日アクセス.

## 講評

京西テクノス株式会社 代表取締役

白井 努

奨学生の皆さん、本日の提言発表をありがとうございました。1年前に皆さんと面接をした折とは見違えるほど大人になった印象を受けて大変に嬉しく思います。三つのグループの発表の各々につきまして、私より講評をさせていただきます。

最初に発表のあった健康・福祉・環境グループですが、大日向学長の特別講演に相通ずる内容であったかと思えますし、少子高齢という問題のど真ん中に入ってきている昨今、その問題意識を持って、地域の方々に直接にヒヤリングと調査を行って、また、イベント自体を実行したという事で、こうした問題への理解が深まっただろうと思います。そこで私が一つ思ったのは、今日の発表の内容は「シニアの起業を学生がサポートする」という流れであったかと思うのですが、その逆で「新しいアイデアを若い世代が生み出して、そうしたアイデアを持った学生の起業を会社人生の長いシニア層の方々に起業する会社の仕組みづくりをサポートしてもらおう」、つまり、企業人としての知識や経験を頂いて、それを有効活用するという発想もありだと思いました。「人生は100年」という時代が訪れていて、誰もがシニアになる訳で、皆さんも必ずシニアになりますので、それを意識できたことは良い経験だったのではないのでしょうか。

続いて、教育・文化グループですが、ビデオの中では「見事なYouTuberぶり」だったですね。質疑応答の中にもありましたが「地域へのリスペクト」という部分がより鮮明になっていくと思います。残りのビデオ収録にはこのあたりが反映されるとよいと思いました。多摩の大学生が多摩の魅力を発信していくことは非常に価値があることなので、今後も継続してくれることを希望します。加えて、今日の発表学生の中でも多摩地域の出身者は少ないようなので、多摩地域のいろいろなポテンシャルに気づいていただいて、できれば住んでもらいたいと思った次第です。

最後の産業・企業グループにつきましては、その発表の冒頭の報告にあった「多摩の学生が多摩地域の企業に就職しているのは、僅かに4%である」のは、聞いていて非常にショックでした。多摩地域の中小企業は新卒大学生を採用したいのですが、実際問題としては時間とコストが非常にかかるのです。あるいは、インターンシップもおおいに引き受けたいのですが、例えば2週間、学生のお世話することは大変な労力となります。このように中小企業のインターンシップの受け入れ態勢が整ってないので、社長自らが全てに対応しなければならないケースもあって、受け入れたいがなかなか事情が許さないというジレンマもあります。

昨年の奨学生プロジェクトにおいても「多摩の中小企業の魅力発信サイトの構築」という取り組みがありました。そのような情報発信型と、今日、発表された直接対話型の「生業マルシェ」も参考にしながら、私たちも努力して、複合技として、前述の4%を少しでも改善の方向に持って行きたいと思っております。

報告のあったアンケートにおいて「大学生は中小企業の経営は不安定だと感じている」というものがありましたが、決して、そのようなことはありませんので、ここは強調しておきます。さ

で、今現在、多摩未来奨学金の制度自体を見直しておりまして、発表内容が、今まで以上に学生と起業が密接に関わり合えるような仕組みに変えていく検討材料に反映されるとよいと考えています。

ここで、多摩未来奨学金全体を総括させていただきますと、「多摩未来奨学金」の制度は、この多摩地域だからこそ実現していることであって、これも多摩地域のポテンシャルであると私自身は思っています。学生の皆さんには、このことを胸に刻んでおいて欲しいと思いますし、異なる大学の学生が集ってプロジェクト活動をした経験が、今後の人生に役立つことを願っています。そしてプロジェクト活動をサポートして下さったコーディネーターの方々には感謝申し上げます。

## 講評

法政大学 常務理事・副学長

増田 正人

本日、発表のあった3グループの講評をさせていただきます。夏に中間発表会がありましたが、その時に聞いた内容に比べると、すべてのグループともに中身は深まっていたと感じました。これから各グループについては、少し厳しめになるかも知れませんが、話させていただきます。

最初の健康・福祉・環境グループにおいては、対策の主体を見出し、それにどのように関わっていくかという流れだったのですが、実際に多摩大学で行ったイベントでいくつかの提案がなされた訳です。グループのテーマの「健康・福祉・環境」と大日向学長の講演内容と”掛け合わせ”みて、達成できた部分を考えてみるとよいでしょう。学園祭を一つの場として用意したと思いますが、多摩地域には数多くの大学、すなわち大学祭があるので、それらを集めると別の可能性も見えてくるでしょうから、もう少し幅広く考えてもらおうと今後の展開に繋がるのだろうと思います。そうした今後の展開に繋がるような種は発表の中にちりばめられていたと感じましたので、引き続き成長させてもらいたいと思います。起業というキーワードがありましたが「責任とリスク」の問題は切り離せないで、これも考えて欲しかったと思います。

二番目の教育・文化グループの内容は、「多摩の魅力を動画で表す」ものでした。発表においては、文字と動画の有効度を協調してましたが、実際に皆さんが作られた動画が「動画の良さが説明された動画」になっていないのかどうか、考えて欲しいと思います。言葉で伝えられない点を動画で伝えるというならば、先ほど話しが上った「多摩地域へのリスペクト」が動画内に含まれていたかどうか、見直してみてください。今年の流行語で「インスタ映え」があるが、写真と動画の組み合わせも考えてみると良かったかも知れません。

プロジェクトの開始時に人口流出を課題として捕らえたのであるが、その対応策として「提案された動画」の内容では、多摩に住もうとか、多摩の大学に来ようとか、多摩で就職しようとは、思わないのではないのでしょうか。

それでは、多摩地域の魅力を伝えようと考えた時、どのような魅力をどのレベルで伝えるべきかを十分に考えて欲しかったです。

当然、魅力の内容を掘り下げることも重要ですが、選択すべき魅力の大きさも検討すれば良かったでしょう。

三番目の産業・企業グループでは、アンケートなどを通じて現状と実体を示しつつ、「生業マルシェ」という形でイベントとして纏めあげて、課題の克服を試みたということでした。最近の大手企業のインターンシップの一つに「1日インターンシップ」というものがあって、実体としては就職面接の様相も感じるのですが、こうした「1日インターンシップ」も視野に入れて考察し

てみると「知り合うというイベントを企画する」場面では、もう一歩をどのように踏み込めばよいのか見えてくるので、より成果があったようにも感じます。

ここで折角の機会なので、もう少し幅広くコメントいたします。本日は、大日向学長の講演と文科省の平野氏の話を聞かせていただいたところですが、いま、大学な何を考えているのかについてお話いたします。

「このようなカリキュラムで教えていきます」あるいは「高大連携はこうします」と教育カリキュラムの編成を進めた時に、「学生が地域に残って地域で働く」という内容が、果たして大学のカリキュラムに残るだろうかと考えてみると、それは含まれてこないだろうと思っています。そうであれば、それぞれに地域社会で何をすべきなのか、考えないといけません。いま大学が都心回帰を考えているのか、こうした状況も踏まえてみると多摩地域の大学は、それぞれ個別の大学ではなく多摩地域全体の大学のことを考えていなくてはならないし、企業の方々も同様に考えていかないと、これまでとは違う10年が現れてくると思います。

それを考えれば、今日、発表した奨学生の皆さんの問題意識や危機感是非常に重要なことなのですが、真に重要なことをピックアップして、それを我々が引き取っていかないとならないのだと改めて思います。

発表の中身としてはまだまだ不十分な点が多々あったと思うのですが、その中にあった感性は評価できるものがあるので、大人たちも受け止めていきたいと思いました。

## 寄附協賛企業・団体等 (50音順)

昭島ガス株式会社  
安藤物産株式会社  
株式会社イデオモータロボティクス  
株式会社いなげや  
株式会社うかい  
HKT 株式会社  
エコア株式会社  
エムケー株式会社  
株式会社エリオニクス  
応用光研工業株式会社  
株式会社岡本製作所  
株式会社学生情報センター  
勝田産業株式会社  
株式会社環境管理センター  
株式会社キャリア・مام  
株式会社クローバーズ  
京西テクノス株式会社  
旭栄研磨加工株式会社  
株式会社グッディーホーム  
京王電鉄株式会社  
国際計測器株式会社  
株式会社指田製作所  
株式会社CSS技術開発  
JR 東京西駅ビル開発株式会社  
シチズンホールディングス株式会社  
新日本物流株式会社  
積水ハウス株式会社多摩支店  
株式会社セレモア  
株式会社創建  
株式会社相信  
株式会社立飛ホールディングス  
たなべ物産株式会社  
多摩信用金庫  
千代田運輸株式会社  
株式会社テージャーケー

テクノブレーンズ株式会社  
東京システム運輸ホールディングス株式会社  
東成エレクトロビーム株式会社  
東洋システム株式会社  
株式会社藤和ハウス  
株式会社トーコー  
株式会社ナジック・アイ・サポート  
日本 WeP 流通株式会社  
日本たばこ産業株式会社  
日本電子株式会社  
日本電子工業株式会社  
日本ビニールコード株式会社  
福永紙工株式会社  
武州工業株式会社  
武陽ガス株式会社  
株式会社ベネッセコーポレーション  
株式会社ホトロンホールディングス  
株式会社ホリコー  
前田金属工業株式会社  
株式会社マキノ  
株式会社三浦組  
南観光交通株式会社  
株式会社武蔵境自動車教習所  
株式会社メディアラボ  
株式会社メルヘン  
株式会社物井工機  
森屋建設株式会社  
株式会社ヤマデン  
山三電機株式会社  
税理士法人 弓家田・富山事務所  
株式会社吉井製作所  
吉野化成株式会社  
芳村石産株式会社  
株式会社よみうりランド  
個人：佐藤浩二 様

## 多摩ブルー・グリーン倶楽部

エムケー株式会社  
株式会社エリオニクス  
株式会社キャリア・مام  
京西テクノス株式会社  
協同組合国立旭通り商店会  
旭栄研磨加工株式会社  
株式会社CSS技術開発  
新日本物流株式会社  
たなべ物産株式会社  
東京システム運輸ホールディングス株式会社  
東成エレクトロビーム株式会社  
株式会社藤和ハウス  
日本分析工業株式会社  
白山工業株式会社  
武州工業株式会社  
武陽ガス株式会社  
前田金属工業株式会社  
南観光交通株式会社  
株式会社メルヘン

## 協力企業・団体

多摩信用金庫  
多摩ブルー・グリーン倶楽部  
日本政策金融公庫 立川支店 中小企業事業

平成28年度多摩未来奨学金報告書

---

2018年3月31日発行

発行所 公益社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩  
〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 明星大学20号館 6階  
TEL 042-591-8540 FAX 042-591-8831  
E-mail office@nw-tama.jp